はじめに

はじめから私的な話で恐縮ですが、私が漠然と「個とチーム」について考えるようになったのは、高校時代に主将としてサッカー部を仕切る立場になったころだったと思います。大学時代は100人の部員を抱える伝統的蹴球部に属し、「チームとクラブ」のあり方について悩みました。スポーツ社会学との出会いが、ものごとを整理するのに役立ったのを覚えています。大学院時代は少年サッカーや地域クラブの活動を通して「クラブと地域社会」のことを考え、実践するチャンスをいただきました。

高校教員になってからは人材育成と環境づくりに取り組んでいますが、「個～チーム～クラブ～社会」の関係をどう調和させていくかという問題意識は、いつも頭の片隅にあるような気がします。それは「集団の意思をどうやって決定するか（個人の意志と集団の意思）」「決まったことを誰が、いつ、どのように進めるか」「周囲の理解と支援を得るにはどうすればよいか」「末永く続けていくには…」といったことも含まれます。

2013年度末に開かれたシンポジウム「スポーツクラブの法人化を語ろう！」は、このような問題意識が原点にありました。日本初の社団法人サッカークラブ神戸FCについては賀川浩さん、ラグビーの普及・育成に取り組むNPO法人みなとラグビースクールは黒崎祐一さん、地域クラブの支援に取り組む認定NPO法人クラブネッツは水上博司さんと、各クラブの創設から率いてこられた方々から、生々しくも示唆に富む、貴重なお話をいただきました。主催の「スポーツ文化研究会　サロン2002（当時）」自身がNPO法人化準備の真っただ中にある時期でしたので、シンポジウムで交わされた意見や情報はすべて自分たちの問題として受け止めることができました。本報告書のシンポジウム編にその全容が記されています。

寄稿編は、サロン2002の法人化に深くかかわった会員からのコメントです。サロン2002の法人化過程が一筋縄ではいかなかったことが伺えるとともに、紹介されたいくつかの事業やクラブの先進事例を通して、法人化クラブの大きな可能性が感じられます。

5月31日に「特定非営利活動法人サロン2002」の設立総会を開き、10月に東京都からNPOの認証を受けた私たちは、新たな一歩を踏み出しました。資料編にはサロン2002法人化過程の最終段階で会員に送った文書をいくつか掲載しました。スポーツクラブの運営に携わる方、法人化を検討されている方の参考になれば幸いです。また、本報告書はサロン2002を知るためのガイドブックとしても有効です。「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」という“志”に賛同される方はぜひ、ホームページをご覧ください。

2013年度の公開シンポジウム報告書が年内に完成し、皆さまのお手元に届いたことをうれしく思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

2014（平成26）年12月
特定非営利活動法人サロン2002
理事長　中塚義実

目　　次

はじめに……1
NPO法人サロン2002理事長　　中塚義実

目　次……2

シンポジウム編……3
資　　料　シンポジウム開催要項……4～5
シンポジウム　演者等プロフィール……6～7

はじめに……8
Ⅰ．日本初の社団法人サッカークラブ「神戸FC」を語る……9～16
スポーツジャーナリスト　　賀川　浩
Ⅱ．NPO法人のラグビークラブを語る……17～29
NPO法人みなとラグビースクール理事長　　黒崎 祐一
Ⅲ．クラブ文化と認定NPOを語る……30～34
認定NPO法人クラブネッツ副理事長／日本大学　　水上 博司
Ⅳ．ディスカッション……35～46
参加者アンケート……47～49
サロン2002公開シンポジウム一覧（2001～2013）……50

寄　稿　編……51
法人化プロジェクトを振り返って……52～57
法人化プロジェクトリーダー　　奥山 純一
サロン2002の法人化とFCバルセロナの舞台裏……58～59
㈱La Esperanza 代表取締役／FC バルセロナ前代議員　　小池 正通
途上国支援とサロン2002法人化……60～63
中央大学大学院総合政策研究科／NPO 法人サロン 2002 理事　　岸 卓巨
NPO法人化成功のヒント……64～66
認定 NPO 法人 日本民家再生協会 会員／NPO 法人サロン 2002 副理事長　　笹原 勉
法人化するとはどういうことなのか……67～69
帝京大学／NPO法人かながわクラブ／NPO法人サロン2002監事　　茅野 英一

資　料　編……71
法人化準備段階……72～104
2014年5月31日　設立総会……105～109
特定非営利活動法人サロン2002関係……110～119
特定非営利活動法人サロン2002　設立趣旨書……110～111
特定非営利活動法人サロン2002　定款……112～119
サロン2002月例会一覧（1997～2014）……120～125

シンポジウム参加者・報告書作成にご支援いただいた方々……126

シンポジウム

「スポーツクラブの法人化」を語ろう！

日本初の社団法人サッカークラブ「神戸 FC」を語る

賀川　浩（スポーツジャーナリスト）

NPO法人のラグビークラブを語る

黒崎祐一（NPO法人みなとラグビースクール理事長）

クラブ文化と認定NPOを語る

水上博司（NPO法人クラブネッツ副理事長／日本大学）

コーディネーター　　中塚　義実　（サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校）

2014.3.17.

サロン2002　公開シンポジウム

「スポーツクラブの法人化」を語ろう！

スポーツ文化研究会「サロン 2002」は、スポーツを通しての 21 世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする人びとのネットワークです。月 1 回の月例会はすでに 200 回を越え、公開シンポジウムは 2001 年度から毎年開催しています。

今年度は標記タイトルでシンポジウムを企画しました。「チームからクラブへ」「任意団体から法人格を持った団体へ」というのがこのシンポジウムのキーワードです。日本初の社団法人サッカークラブ「神戸 FC」、NPO 法人としてラグビーの普及に取り組む「みなとラグビースクール」、そして総合型地域スポーツクラブやスポーツ NPO の支援に取り組む「クラブネッツ」の事例をご紹介いただくとともに、主催者である「サロン 2002」が法人化へ向けて準備を進めていく中で直面したことなどもご紹介します。

スポーツクラブを運営されている方、これから立ち上げようとされている方、NPO に興味をお持ちの方、あるいはサッカーやラグビーなどのスポーツに関心のある方など、さまざまな立場の方が、立場を越えて交流できる場となることを願っています。ぜひお越しください！

なお、「サロン 2002」の趣旨とこれまでの公開シンポジウムについては裏面に掲載しています。

スポーツ文化研究会サロン2002
理事長　中塚義実

記

主　催　：　スポーツ文化研究会「サロン 2002」

後　援　：　一般財団法人日本クラブユースサッカー連盟、一般社団法人神戸フットボールクラブ、
認定特定非営利活動法人クラブネッツ、特定非営利活動法人みなとラグビースクール

日　時　：　2014（平成 26）年 3 月 30 日（日）　13:30～16:30　（受付 13:00～）

会　場　：　筑波大学東京キャンパス1F　119講義室
〒112-0012　東京都文京区大塚3-29-1
丸の内線茗荷谷駅下車「出口１」徒歩２分程度

演　者　：　賀川　浩（スポーツジャーナリスト）…　日本初の社団法人サッカークラブ「神戸 FC」を語る
黒崎祐一（NPO法人みなとラグビースクール理事長）…　NPO法人のラグビークラブを語る
水上博司（NPO法人クラブネッツ副理事長／日本大学）…　クラブ文化と認定NPOを語る
（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ兼）中塚　義実　（サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校）…　サロン 2002 の法人化を語る

参加申込　：　下記「サロン 2002 公開シンポジウム参加申込フォーム」からお申し込みください。
http://bit.ly/PvAguJ

参加費　：　1,000 円

事務局　：　本多克己・嶋崎雅規（サロン 2002 理事）
※お問い合わせは　salon.symp@gmail.com　までお願いします。

＜スポーツ文化研究会「サロン 2002」とは何か＞

「サロン 2002」は、以下の設立宣言に賛同する「同志」によるゆるやかなネットワーク組織です。

サロン 2002 設立宣言

（2000 年 4 月 1 日）

我々は、以下に「サロン 2002 の“歴史”」、「サロン 2002 の“志”」及び「サロン 2002 の“会員”」を述べることにより、ここにあらためてサロン 2002 の設立を宣言する。

【サロン 2002 の“歴史”】

サロン 2002 は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社・心グループ」（財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、1980 年代後半からこの名称で活動）を前身とし、1997 年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン 2002」として活動を行ってきた。

【サロン 2002 の“志”】

サロン 2002 は、サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン 2002 の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン 2002 の“志”を実現する上で、2002 年 FIFA ワールドカップ韓国／日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

【サロン 2002 の“会員”】

サロン 2002 は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン 2002 の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。ただし会員は、サロン 2002 からの“Take”を求めるだけでなく、サロン 2002 に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン 2002 は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形での“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。

2013 年度の会員は、現時点で約 180 名。全国各地にいる会員は、小・中・高・大の学校関係者、Jクラブ・地域クラブの関係者、フットサルや草サッカーの関係者、新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどのメディア関係者、サポーターやボランティア、サッカー以外の競技の関係者など多様です。国や地方自治体のスポーツ行政に携わる者や、JFA、各都道府県 FA 関係者もいます。様々な形でサッカー・スポーツにかかわりながら、“志”を実現させようと活動する者で構成されるのが「サロン 2002」です。

「サロン 2002」の主たる活動は、通算回数が 200 回を越える月例会の開催と、その内容を核とするホームページの運営です。本シンポジウムは公開型月例会として 2001 年度より毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しています。

詳細は、ホームページ ＜http://www.salon2002.net＞ をご覧ください。

＜サロン 2002 公開シンポジウム＞

2001 年度…FIFA ｺﾝﾌｪﾃﾞﾚｰｼｮﾝｽﾞｽﾞｶｯﾌﾟ総括
2002 年度…FIFA ワールドカップ総括
2003 年度…地域で育てるこれからのスポーツ環境
2004 年度…totoを活かそう！
2005 年度…クラマーさん、ありがとう！
2006 年度…2006 年ドイツで感じたこと
2007 年度…ｻｯｶｰ観戦を楽しもう！－ｽﾀｼﾞｱﾑ編
2008 年度…地域からみたJリーグ百年構想
2009年度…2019年ﾗｸﾞﾋﾞｰﾜｰﾙﾄﾞｶｯﾌﾟを語ろう！
2010年度…育成期のサッカーを語ろう！
2011年度…高校サッカー90年史を語ろう！
2012年度…U-18フットサルを語ろう！

＜公開シンポジウム報告書について＞

本シンポジウムの内容は、後日、報告書にまとめ、サロン2002のホームページ上で公開します。
主催者に無断で、個人のホームページ、ブログ等に掲載されぬよう、よろしくお願いいたします。

＜シンポジウム　演者等プロフィール＞

賀川　浩（スポーツジャーナリスト）

1924 年、神戸生まれ。神戸一中、神戸経済大（現・神戸大）大阪クラブなどでサッカー選手。全国大会優勝、東西対抗出場、天皇杯準優勝などの経験をもつ。1952 年からスポーツ記者、1975 年から 10 年間のサンケイスポーツ編集局長（大阪）などを経て現在フリーランスとして、現役最年長記者。2010 年、日本サッカー殿堂に掲額された。

1963 年の兵庫サッカー友の会、1970 年の社団法人・神戸フットボールクラブの創設メンバー。ワールドカップの取材 9 回、ヨーロッパ選手権 5 回、南米選手権 1 回。2014 年には 10 度目のワールドカップ取材を計画中。

1970 年に日本で初めての法人格市民スポーツクラブ「社団法人神戸フットボールクラブ」の設立当初、さらにその前身の兵庫サッカー友の会設立に関わった一人。クラブの牽引車であった加藤正信氏（故人）の仕事を振り返りながら、法人化へのいきさつと理念を紹介する。

黒崎祐一（NPO 法人みなとラグビースクール理事長）

1976 年、 東京都港区生まれ。明治大学附属中野中学 3 年次に全東京ラグビー中学代表に選ばれ、高校 3 年次には東京都代表として国民体育大会少年の部で優勝。翌年の全日本ラグビー高校代表ウェールズ遠征に参加。明治大学ラグビー部では 1996～1998 で関東大学対抗戦 3 連覇。1995～96 は全国大学ラグビー選手権大会で優勝を経験するなど華々しいキャリアを持つ。

◆大学卒業後の職歴は次のとおり。

1999 年 4 月　日商岩井株式会社 入社
2003 年 1 月　株式会社メタルワン 転籍(※1)
2007 年 8 月　同社 休職(※2)
2009 年 4 月　同社 復職
2012 年 4 月　同社 大阪鉄鋼部薄板課 課長代理 (現在)

(※1)日商岩井(現双日)と三菱商事の鉄鋼製品事業部門が分離・統合し、部門所属社員全員が転籍
(※2)社会貢献休職適用時は、明治大学体育会ラグビー部シニアコーチとして学生を指導

◆ラグビー指導者としての経歴は次のとおり。

2001～03 年　明治大学付属中野高等学校ラグビー部 ヘッドコーチ(※1)
2003～07 年　明治大学体育会ラグビー部 コーチ(※2)
2004～09 年　日本ラグビーフットボール協会　普及育成委員(※3)
2007～09 年　明治大学体育会ラグビー部 シニアコーチ(※4)
2010 年　日本ラグビーフットボール協会　事業委員
2010 年～現在　関東ラグビーフットボール協会・東京都ラグビーフットボール協会　普及育成委員
2010 年～現在　NPO 法人みなとラグビースクール 理事長・校長(※5)
2013 年～現在　一般社団法人港区ラグビーフットボール協会 理事長

(※1)土日祝日を中心に明治大学八幡山グラウンド(東京都世田谷区)にて高校生(部員 30 名)を指導
(※2)土日祝日を中心に明治大学八幡山グラウンド(東京都世田谷区)にて大学生(部員 100 名)を指導、2005 年 6 月から名古屋支社勤務(単身赴任)時も同様に指導を継続
(※3)土日祝日を中心に全国の小学生に対するタグラグビーの普及・啓発活動を展開
(※4)フルタイムで明治大学八幡山グラウンド(東京都世田谷区)にて大学生(部員 100 名)を指導
(※5)山手線内唯一の幼児～中学生のラグビースクールを港区・青山に設立し、初代校長に就任。2012 年 4 月から大阪支社勤務(単身赴任)となるも週末に帰京し指導を継続中

水上博司（認定 NPO 法人クラブネッツ事務局長／日本大学）

三重大学から 2006 年に日本大学文理学部へ。スポーツ社会学とバレーボールを教えている。2012 年度まで、日本サッカー協会 B 級・A 級指導者養成講習会講師として、中塚らと共通科目「スポーツの社会科学」を担当。三重大学で教鞭をとっていた 1998 年、黒須充氏（福島大学）といっしょに「クラブネッツ」を創設。翌年 7 月ネッツを法人化。今年 2 月には認定 NPO 法人を取得。

シンポジウムではまず、クラブネッツが 1999 年の設立から東日本大震災の 2011 年 3 月までどのような事業を行ってきたのか、その間の NPO 運営の問題点は何かをお伝えしたい。NPO 法人の総数が 5 万近くにまでに増え続けているが、一方で解散法人も少なくない。そこに休眠法人まで入れるとその数は全体の 3 割にも上ると言われている。ではなぜ休眠状態になってしまうのか。ネッツの団体運営経験からそのことに触れたい。

次に東日本大震災後。ネッツはこれまでの NPO 運営の反省を迫られるが、震災前にやっていて良かったと気づかされたこともあった。例えば、被災 3 県の総合型クラブへの支援を呼びかけた「子どもスポーツ支援プロジェクト」。なぜ私たちのような NPO に支援が集まったのかを考えてみたい。

そして認定 NPO 法人取得までの 1 年 2 ヶ月の話。ここでネッツはこれまでにない数多くの NPO 向けセミナーに参加し、「スポーツ以外の」NPO の人たちから大きな刺激を受けた。いったいスポーツの NPO はこのままでいいのか、これから何をやらなければいけないのか、ということに気づき、ネッツミッションの再構築の必要性を考えるようになった。

クラブネッツのこれまでの経験をお伝えし、皆さんと意見交換したい。

中塚 義実（サロン 2002 理事長／筑波大学附属高等学校）

大阪府立三島高等学校卒業後、1980 年に筑波大学体育専門学群入学、蹴球部所属。同大学院修士課程でスポーツ社会学を専攻、修士論文は「日本サッカーのプロ化過程の研究」。

1987 年より現職。保健体育科教諭、サッカー部顧問として高校生の指導に当たるとともに、学校教育・体育関係、サッカー・スポーツ関係でさまざまな顔を持ち、幅広いネットワークで活動している。

1996 年度にユースサッカー「DUO リーグ」を創設、いまでは JFA の指導のもとで全国に広がるユースリーグ構想の原点を実践・紹介。フットサルでは 2001 年度から U-18 年代の公認大会を東京都サッカー協会で主催。今年からはじまる JFA 主催大会につながる第一歩であった。

2008 年度からは筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ理事長。「日本サッカーの宗家」と言える同クラブは、2010 年度から現役学生と卒業生を含めた多世代型クラブ組織として再編し、日本型の新たなクラブ像を目指している。このほか全国高体連研究部活性化委員長などを務める。

1997 年度より「サロン 2002」の名称を用いる本研究会は、前身時代を含めると約 20 年間、任意団体として活動してきた。「法人格の取得を」との議論は設立当初からあったが、なかなか踏み切れない状態が続いていた。それなりには活動できていたが、特定の個人に依存する体質からの卒業と、“志”である「スポーツを通した“ゆたかなくらし”」に貢献できるような事業に取り組んでいきたいとの願いから、NPO 法人化へ向けて準備を進めているところである。

注）プロフィールは、公開シンポジウムが開かれた 2014 年 3 月 30 日時点のものです。

サロン２００２公開シンポジウム

「スポーツクラブの法人化」を語ろう！

演　者：賀川　浩（スポーツジャーナリスト）
黒崎祐一（NPO 法人みなとラグビースクール理事長）
水上博司（認定 NPO 法人クラブネッツ事務局長／日本大学）
中塚 義実（サロン 2002 理事長／筑波大学附属高等学校）＝コーディネーター兼

はじめに

中塚：皆さんこんにちは。「サロン 2002」の理事長を務めております中塚と申します。「サロン 2002」に関してはお手元の A4 判裏表の資料をご覧ください。「サッカーやスポーツを通して“ゆたかなくらし”を作っていこう」という共通の“志”を持つ人たちの全国ネットワークで、毎月の月例会と、年 1 回の公開シンポジウムを開いています。今回もシンポジウムの告知が遅れぎみで、100 名収容の会場ですが少数精鋭で進めて参ります。

今年のテーマは、「スポーツクラブの法人化を語ろう！」です。

1990 年代の終わり頃、私は今回のシンポジウムの後援団体の一つである日本クラブユースサッカー連盟の理事の一人として、「21 世紀型スポーツクラブシンポジウム」という事業に携わっておりました。1997 年 12 月 2 日に開かれた第 1 回目のシンポジウムのキーワードは「チームからクラブへ」でした。従来の日本のスポーツ組織は、試合を行う“チーム”しかありません。登録の仕方もチーム単位。学校中心のスポーツ環境では、年度単位の単発的なチームしかありません。卒業したら追い出されます。本当にそれでいいのか、というのがこのときのシンポジウムでの問題提起でした。話を進めていくうちに、体力のあるクラブ、長続きするクラブを育て、永続的なものにしていくために、任意団体で大丈夫なのかという話が出てきました。ちょうどこの頃、NPO 法ができました。そして 1998 年 8 月に開かれた 2 回目のシンポジウムでは「スポーツクラブの法人化」というテーマを取り上げました。

今回のシンポジウムは、この流れをくむものです。十何年ぶりの続編と言えるでしょう。様々な事例をもとに、みんなでスポーツ、あるいはクラブのあり方を議論していこうというのが今回の趣旨です。18 時 30 分まで、密度濃く進めていきたいと思います。

全体は二部構成です。第 1 部は、3 名の演者の方々にそれぞれの事例をご紹介いただきます。質疑はその都度行います。少しばかり小休止をはさんで第 2 部では、主催団体であるサロン 2002 の法人化の事例を取り上げながら、全体でのディスカッションを進めて参りたいと思います。それでは 3 名の演者を順にご紹介します。まずは日本初の社団法人サッカークラブ神戸 FC について話していただきます、スポーツジャーナリストの賀川浩さんです。

賀川：賀川です。

中塚：次にお話しいただくのは、秩父宮ラグビー場のある港区で、NPO 法人みなとラグビースクールの理事長を務めている黒崎祐一さんです。

黒崎：黒崎です。よろしくお願いします。

中塚：最後は、クラブネッツの、これがどういうクラブなのかは後ほど話をしていただきますが、副理事長をされております水上博司さんです。

水上：こんにちは。よろしくお願いします。

中塚：それでは賀川さんからよろしくお願いします。

Ⅰ．日本初の社団法人サッカークラブ「神戸FC」を語る

賀川　浩（スポーツジャーナリスト）

１．自己紹介

賀川浩でございます。今回まで何度かお話させていただきました。皆様はまだ生きているのかと思っているかと思います。今年の誕生日でいよいよ 90 歳になります。サッカーの話をすると長くなると思いますが、今回は友の会から社団法人神戸 FC を作った頃の話をします。あまり得意な話ではないので、予定通りに 20 分で終わると思います。ここに簡単な刷り物を用意したのでご覧ください。2 枚あります。44 年前の神戸 FC の社団法人化というタイトルです。何しろ古い話ですね。歴史的には珍しい話ですが、今日はいろいろな法人格ができやすい仕組みがありますので、この古い話が現在の事に参考になるかどうか分からないですが、歴史的なこととしてお話したいと思います。

２．「兵庫サッカー友の会」の誕生と少年サッカースクール活動の展開

1970 年に社団法人神戸フットボールクラブというものを作りました。実はその前に、東京オリンピックの前の年の 1963 年 12 月に「兵庫サッカー友の会」というのを作りました。これは、京都のサッカー協会の会長にもなりました藤田静夫さんたちが「京都サッカー友の会」をスタートさせたものを真似て兵庫で作ったんですね。東京オリンピックを控えてサッカーも盛んにするためには日本代表を応援する。日本代表の試合をみても応援する人数が少ないから、応援するようなメンバーを集めようというふうに、いまと全く違う時勢に対して「友の会」というものを作ってバックアップすることから始まりました。それと同じものを兵庫でも作ってやり始めました。

考え方としては、加藤ドクターと大橋さんという小学校の先生。御影師範という、戦前に強かった兵庫の師範学校の卒業生で、当時は小学校の校長先生でしたが、その先生らが集まって相談し、次の目標が立てられました。

1　少年サッカーの普及発展
2　誰でも入れるチームの編成
3　国際試合のできる専用球技場の建設
4　芝生のサッカー場、特に少年専用の建設
5　サッカー王国神戸・兵庫の再現

東京オリンピックの翌年に、「友の会」では少年サッカースクールを始めました。サッカースクールというのが当時の日本の時勢にあっていたのかもしれませんが、たまたま朝日新聞に大谷四郎さん、毎日新聞に岩谷俊夫さんという、新聞社にそれぞれ籍をおいている仲間がいたものですから、実際の規模の割には新聞の扱いも大きく、日本全国の少年サッカーブームのきっかけのひとつとなりました。

ということで、だんだん「友の会」の事業が発展していきます。この中にはご存知の方もいらっしゃると思いますが、加藤正信というお医者さん。神戸一中の 31 回の卒業で、岡山第六高等学校で旧制インターハイで活躍し、岡山医大を卒業されたドクターです。戦争中は軍医さんで熊本の病院の病院長などしておりましたが、戦後、例えば御殿下のグラウンドでの天皇杯の時にあまり泥んこで選手たちがかわいそうだとか、いろんなサッカーの現状に飽き足らず、いよいよ自分でやらないかんと思われて、この人の機関車のような推進力によって、ほとんど数年のうちに、目標に掲げていた 1、2、3、4、5 がすべてできてしまったような感じなんです。

そして、神戸のいまの屋根付きスタジアム、W 杯でも使ったヴィッセル神戸のノエビアスタジアムの前身が神戸御崎球技場で、この神戸御崎球技場が、加藤正信先生をはじめとする市民の運動と神戸の理解で 1969 年にすでにできていました。照明付きのグラウンドが西日本にできたのも神戸市の理解があってですけど、市議会が反対しないように 4 万通ほどの署名運動を考え出して、4 万人の市民の署名を集めて実行に移させたというエピソードもあります。こういうのは全部この加藤正信ドクターの馬力と、市や県に対する根回し、非常に丁寧な仕事ぶりでほとんど成り立ったわけです。

３．サッカースクールから法人化クラブへ

それが一段落した時に、私どもが一番気にしたのは、何かの広告で子どもたちが「僕、サッカー習ってないんだもん」といっていたんですね。サッカースクールということを言い出したものですから、皆さんサッカーは習うもんかと。それはいかんと。サッカーは慣れるものだということで、足でボールを扱うものですから慣れることから始めなきゃいけないのに、習うものだと思っている。サッカースクールはいいのか悪いのかという論議になりまして、そこからクラブというもの、定期的にボールを蹴れるクラブをつくろうとなったんですね。

サッカースクールというものは、当時、小学校単位で学校の先生が教えていることがありましたけど、特定のしっかりとしたコーチが、不特定多数の子どもたちに、第何日曜に集まって教えなさいという仕組みでやったわけです。回数は少ないけど、サッカースクールという響きがいかにもよかったみたいで全国に広まったと私たちは思っています。

スクールというやり方がいいのか悪いのかということを考え、次に、毎日ボールを蹴るクラブにしようじゃないかということを考えたんです。それをするためには、それまでボランティアで岩谷俊夫君という日本代表のコーチをしている男がやってくれたこともありましたが、転勤になって長続きしません。ということで、日頃子どもたちに接する有給のコーチを作らないといけません。優秀なコーチに来てもらうためには、その背後のクラブがしっかりした組織でないといけない。そこで法人化ということになったんです。

財団法人にするにはお金がなかなか集まりませんので社団法人にしようということになり、これも加藤正信ドクターを中心に。当時は法人化というのが難しかったですけど、教育委員会の指導のもとにそれができたわけです。

法人は作るといろいろと規定がありますから、厄介なものだったんですね。法人化したおかげで、総会を開かないといけないとか、理事会を開かないといけないとか。そういう仕組みの中で、スタイルができていきますと、加藤正信のような超人的な個人がいなくても、普通の人の寄り合いで運営していける形ができます。そんなに大きなお金ではありませんでしたけど、一般の寄付を仰いだり、企業から応援してもらったりというのは少年が比較的安くやりやすかったです。J リーグができてくると、みんなプロの方にお金が動きますから、こういうクラブの方はかえってお金集めが難しい時期がありました。

４．阪神淡路大震災以降の神戸 FC

そういう時期を乗り越えて 1995 年の大震災です。この時には、いまから考えると、いまのような災害への国の援助の仕組みなどが整っていなかったものですから非常にひどいものだったんです。ですけど、そういう時期であっても神戸フットボールクラブは耐えて、もちろん沢山のサッカー仲間から、びっくりするくらいの応援、寄付をいただいたのですけど、そういうことに耐えて今日まで 40 年間運営してきたことは、やはり法人化のおかげだったと思います。

ヴィッセル神戸がスタートする時にも下部組織がないとできないということで、そのアグリーメントを作って、神戸の U－18 をそちらの下部組織にしばらく入れて、ヴィッセルの、いわゆる J の理念としての下部組織を持ったプロのクラブという体裁を整えたのもこういうクラブがあったからこそなんですね。今は離れておりますけど、そういう点で法人化を進めてやっておいて良かったなと思います。

法人して最初に、黒田和生という、後に滝川第二高校にコーチで全国制覇をしたコーチを迎え入れ、加藤正信ドクターの次男坊である加藤寛が大阪体育大学を出てコーチの資格を持ったのでこれを入れて、2 人の専従者で始めた神戸フットボールクラブは、いまでは 8 人の職員のうち 6 人がコーチ兼任です。ボランティアのサッカースクール、ボーイズ、ジュニア、レディースなどのボランティアコーチを合わせると 60 人くらいが、子どもたちや女子のチームを指導していました。

35 周年、40 周年を過ぎましたから、今度はいよいよ 50 周年で、いまの細谷一郎会長のもとで 50 周年をどういった形で迎えるかを非常に楽しみにしております。

駆け足で、神戸 FC の法人化、或いは法人化以後のことについて話をさせていただきました。先ほど申しましたように、いまと全く時勢の異なる話ですから、昔の苦労話なんかはあまりいまの時勢に関係ないと思いますが、質問がありましたらどうぞ。

中塚：最初の法人格スポーツクラブと言っていいですか？

賀川：そうだと思います。

中塚：神戸 FC のだいぶあとに社団法人クラブとなった塩釜 FC が法人格を取得した 1996 年には、NPO 法はまだできていません。神戸 FC からいろいろアドバイスをいただいたという話を、塩釜の小幡忠義さんからお聞きしたことがあります。賀川さんに質問のある方はどうぞ。

◆質疑応答

1）ヴィッセル神戸との関係

中塚：ではまず私から。J リーグ立ち上げのころ、ヴィッセル神戸の下部組織に神戸 FC が位置付けられたのは、既存の組織と新たに生まれる J クラブが融合した良いスタイルだなと思ったものですが、どこかで分かれたのですよね。そのあたりのいきさつを教えてください。

賀川：あれは、最初はダイエーさんがつきましたね。ダイエーさんの性格上、そんなに慣れてなくて、そんなにヴィッセル神戸の下部組織にまで金を投じることは考えられませんから。一からやらなくても、横滑りで入れていたらいいだろうということで始めた話です。ですから、ダイエーが震災で「これじゃあだめだ」ということで、ダイエー自身が危なくなったので変わったわけですね。そのあと小さいスポンサーはありましたけど、主力となるダイエーが外れたものですから、今度は神戸市が肩代わりする形になってしばらく続きました。川崎製鉄のチームの根幹として。加藤寛がみていたチームをそのままを持っていいって下部組織にしたわけです。それがある程度時間が経って、この形ではいつまでたっても育成に本腰が入らないだろうということで、こちらが撤退し、それからしばらくして、今度は滝川第二で実績を積んだ黒田和生君が加わって、兵庫県全体でバックアップするような仕組みになっています。ヴィッセルも下部組織が強くなっています。

中塚：すると、神戸 FC が下部組織としてやっていたのは、ある意味、一時避難的な対応ということですか？

賀川：J の理念として下部組織を持っていないと承認しないというのが初めからあったので、それは承認してもらうために必要です。もしうまくいけばくっついてしまえばいいですけど。ただ我々としては、プロチームをバックアップする企業の性格によっては、どんなふうに動くかわかりませんから。僕らとしては、プロのクラブより神戸 FC の方が古いんだから、そこでプロのクラブのやり方に引きずられて神戸 FC を潰してはならない。クラブを運営するのは難しく、例えばダイエーが全面的にバックアップしてくれて、うちのクラブを吸収するとなると、「今までの苦労がなくなりますなあ」という役員もいるんですよ。いやそんなわけにはいかない。企業のほうは、いつ調子が悪くなったら逃げ出すかわからんよと。いまみたいにプロクラブがあって、大きい会社も資本を出していますけども、スポンサーという形ですよね。運営はしていない。その頃はまだわかってなかったので、スポンサーでなくて自分たちが運営するという気構えのところもあったので、そういうのは企業が撤退したときにどんなひどい目に遭うかは全日空をみたらわかりますが、そういうことは十分考えられました。ヴィッセル神戸には神戸 FC があるんだということにして、アグリーメントとして下部組織を渡すことにしました。

中塚：ありがとうございます。

２）組織運営安定に不可欠な事務局

千葉（国士舘大学）：今でも地域のスポーツクラブの皆さんはいろいろな仕事を掛け持ちしながらクラブ作りに関わっていて、そこに難しさがあると思うんですけど、法人格を取得されて、そのあたりの組織の運営を安定させることができたのはなぜですか？

賀川：結局、事務局の話ですね。有給の事務局ができるわけです。例えば、黒田和夫、加藤寛というのは、コーチだけではなくて事務もするというところから始まりますから。このサロン 2002 にどれだけ仕事の量があるかわかりませんけど、連絡を取って、資料を作って、皆に配ってだけでも大変な仕事量ですよ。こういうのは神戸 FC の場合、有給のコーチを入れると、3 分の 1 はクラブの事務をやってくれますから、そこで事務局の確立ということになりますね。いまはコーチから入ってない人が事務局長をしています。元のクラブ員ですけどね。事務長、そしてその下コーチ兼任の事務局員が 6 人、その他事務だけが 2 人というふうにやっています。たくさんの会員にいろいろ便宜を図るためには、事務局そのものがしっかりしていないとだめだということですね。

千葉：有給と無給のバランスが取れていたということですか？

賀川：そうですね。給料が高額かはわかりませんけどね。それと、ここ（配布資料）に書いてあって言いそびれているのが一つ。日本のサッカーに貢献したと思うのは、ヨーロッパ式のクラブの会員登録を取り入れたことです。会員登録するときに、いわゆる社会人とか当時の分け方ではなくて年齢で分けたということです。その事が、のちの日本サッカー協会の登録制度が年齢別登録に代わって、のちに J リーグができるときに、中学、高校とか、そういう社会的身分による登録制度と違った、年齢別登録制度ができていたおかげで、プロへ移ったときにも登録がス

ムーズになっているんですね。協会と J との関係もね。これはいささか先鞭をつけたことに関しては、多少、鼻が高いというところであります。

3）総合型地域スポーツクラブへ－体操クラブの試み

本多（株式会社シックス）：今回の講演の相談を神戸 FC さんにさせていただき快諾をいただきましたが、事務局の北川さんからご報告があったので紹介させていただきます。「来年、神戸 FC が運営する神戸少年サッカースクールが 50 周年を迎えます。それに際して、今年の 4 月から一種目増やして、未就学児を対象とした体操クラブを始めて、総合型地域スポーツクラブの仲間入りをしました。100 周年を目指してさらに活動を広めて運営していきます」とのことです。

賀川：サッカースクールを運営するということは、これが一つの神戸 FC の事業の大きな柱であると同時に収入でもあるわけですね。そこのところは面白くてかつ苦心のいるところで、こういうクラブのすべての路線は加藤ドクターの最初の路線に誤りがなかったから、それを踏襲したものです。最初の 1970 年の登録制度をスタートさせたときに女子というものもできましたし、その女子も、私が事務局長のときには全国大会に参加するにはクラブの基礎が弱く、旅費だけでまいっちゃうので、田崎に持ってもらおうということで、真珠屋さんの田崎真珠に移行したわけです。そういった意味でも、先鞭はつけるけど具合が悪くなったらすぐにいろいろやり方を変えて持続することはできたわけです。持続したおかげで、いまは神戸に日本一の女子チーム、INAC 神戸もできたわけです。そういう事が持続性ということで、やっぱり法人化はやっといてよかったなと思いますね。

中塚：賀川さん、ありがとうございました。

賀川浩さん

参考 URL
神戸フットボールクラブ　20 年のあゆみ
http://library.footballjapan.jp/user/scripts/user/story.php?story_id=2339

＜参考：配布資料＞

44 年前の神戸 FC の社団法人化

－1963 年に兵庫サッカー友の会としてスタート－

賀川　浩

日本初の法人格スポーツクラブ、社団法人神戸フットボールクラブの半世紀にわたる歩みを眺め、創成期の先達たちの理念の確かさや、加藤正信ドクターの強大な推進力に驚くとともに、法人化によって個人力の目立った創成期から組織による集団運営への移行によって停滞と変動の時代を生き抜いてきたクラブの姿を見ることができる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

社団法人神戸フットボールクラブは、1970 年 12 月 22 日に設立され、今年で 45 年目に入る。おそらく日本のスポーツ界で初めての法人格市民スポーツクラブだと言える。もともと、このクラブは 1964 年の東京オリンピックの前年の 1963 年 12 月 29 日に誕生した兵庫サッカー友の会（幹事長：大橋真平、会員：1007 人）が 6 年後に法人化したもの。

兵庫サッカー友の会というのは、兵庫のサッカーを戦前のように強くし、東京オリンピックを控えて日本のサッカーを盛んにしようと願う有志の集まりで、御影師範学校（のちに神戸大学教育学部、現在の神戸大学発達科学部）や旧制神戸一中（現神戸高校）の OB たちが中心で、大橋幹事長は昭和初期の御影師範の名 FW、提唱者の加藤正信ドクターは同時代の神戸一中の DF だった。会の発足後 12 月 28 日～30 日の冬休み期間を利用して、第一回のサッカー教室を開いて、中学・高校生を集めて指導した。

加藤ドクターと大橋先生（当時は小学校の校長）は会の夢として次の 5 つを掲げ、実現に踏み出した。

1　少年サッカーの普及発展
2　誰でも入れるチームの編成
3　国際試合のできる専用球技場の建設
4　芝生のサッカー場、特に少年専用の建設
5　サッカー王国神戸・兵庫の再現

東京オリンピックの翌年の 4 月には、神戸少年サッカースクールをスタートし、同じ頃に始まったトップチームの全国リーグ・日本サッカーリーグ（JSL）とともに東京オリンピック後のサッカーブームの火付け役となった。

少年サッカースクールが人気を呼び、参加者が増えるとボランティアの指導者だけでは運営も難しくなってきた。そこで有給のコーチを置くことに。そのためには母体となる友の会の法人化が望ましいと考え、社団法人のクラブをつくることになり、加藤ドクターを中心に準備を進め、1970 年 12 月 22 日に社団法人神戸フットボールクラブが誕生した。

専従のコーチを置くためというのが法人化の第一の目的だったが、同じつくるならヨーロッパ型のクラブをモデルにしようと考えた。

すでに友の会で掲げた目標のうち、

1）兵庫県下や神戸での少年サッカーの普及はどんどん進んでいた。64 年のオリンピックの時に、JFA や体協が西ドイツにならって作ったスポーツ少年団が思わぬ効果を発揮した。小学校単位であってもスポーツ少年団といえば、何らかの折にその学校長の責任を問われなくてすむからであった。兵庫県のサッカー小学生大会は指導者の努力もあり、少年団大会という形で普及に拍車をかけた。（1969 年）

2）誰でも入れるサッカーチームは、友の会ですでに OB チームが近隣の OB チームと試合を始めていた。

3）国際試合の可能なスタジアムは１万５千人収容の御崎サッカー場（夜間照明付き）がすでに 1969 年に竣工。

4）神戸市はその付属施設として少年用の芝生のピッチも造成した。

5）王国兵庫の再現はまだだったが、、、

こうした進展に力を得た会員たちは法人格クラブの創設にも意欲を持ち、会議は熱を帯びた。兵庫県教育委員会によって設立を許可された社団法人神戸フットボールクラブ（KFC）の役員は次の通りだった。

理事（会長）　玉井操
理事（副会長）　田辺五兵衛
理事（常務理事）　大谷四郎・賀川浩・加藤正信・北川貞義
理事　牛尾長男・瀬川幸一・関屋収・空野章・長島隆・皆木吉泰
監事　朝比奈隆・河本春男

1963 年（昭和 38 年）から 1970 年（昭和 45 年）までの 7 年間、つまり兵庫サッカー友の会発足の後 KFC 創設までは、いわばゼロからの出発、無から有への転換だった。幸い、1964 年東京オリンピックから 1968 年のメキシコオリンピックに到る日本代表の活躍や日本リーグの設立といったトップチーム、トップリーグの刺激でサッカー界全体が上昇し、マスメディアの扱いも賑やかだった。それが普及につながり、少年サッカーへの関心も高まり、法人格市民スポーツクラブにもフォローの風が吹いたといえる。

ただし、この後しばらく代表チームが不振となり、また多くのスポーツの台頭によってサッカーへの風はアゲンストともなる。

KFC 創設の時に欧州のクラブに範を取る―といってもドイツのような大陸型であっても、イングランドのプロフェッショナルクラブであっても、スケールや技術の差ということでは桁違いに見えたが、それでも KFC は「プレーヤーの区分は年齢制」という本場―というよりグローバルな考え方を採用した。

「スポーツをするのは社会的な身分―つまり社会人であるとか、大学生であるとかいった区別はおかしい。少年から老年までの人たちが楽しむスポーツだから年齢別にするべきだ」という理念によって、クラブ員も少年部（ボーイズ、ジュニア）、青年部（ユース、18 歳以下）、成人部（シニア、19

歳以上)、壮年部（ベテランズ、30 歳以上）に分けた。少年のボーイズは小学生で 12 歳以上、ジュニアは 15 歳以下でどちらも義務教育年限。この各部にレディース（女子）も加えた。

1974 年に日本サッカー協会が法人格（財団法人）となり、同時に登録制度も▽一種：年齢制限なし、▽二種：19 歳以下（のちに 18 歳以下)、▽三種：16 歳以下（のちに 15 歳以下)、▽四種：13 歳以下（小学生)、▽五種（女子）とするのだが、KFC が自分たちのクラブ内での登録制度を JFA も採用するよう働きかけたこともあった。

クラブができれば、クラブハウスを持ちたい――加藤正信ドクターの自宅の庭の一部を借りて、鉄骨 2 階建ての神戸フットボール会館が 1976 年に出来上がった。

加藤ドクターの推進力によって友の会は法人クラブとなり、クラブルームも持つことになった。ドクターの自宅の庭ではあったが、、、

いまから考えても、加藤ドクターの力がなければこうした法人クラブの設立までできたかどうか――というところだが、法人化によってクラブの運営の組織が作られ、ドクターほどの推進力でなくても組織によってクラブの運営を続け、時代に適応して発展できることを示している。

1995 年の阪神大震災で被災したクラブ事務所は現在 JR 三宮駅や磯上グラウンドに近い都心に移った。そのオフィスでは北川貞和事務局長以下 8 人の職員（うち６人がコーチ兼任）が日常の業務をこなしている。会員のボランティアコーチは少年サッカースクール、ボーイズ、ジュニアユース、レディースなどあわせて 60 人。

少年育成についてはすでに定評があるが、シニア（成人）チームでは６チーム 145 人が公式戦に。40 歳以上 39 人、50 歳以上 29 人が「楽しむ試合」にそれぞれ汗を流している。

副会長であった故田辺五兵衛さんの収集図書を田辺文庫として所有し、文化財としても注目されている。このクラブが 50 周年にはどのような形でサッカー界や神戸の市民社会に貢献してゆくのか興味深い。

Ⅱ．NPO法人のラグビークラブを語る

黒崎　祐一（NPO 法人みなとラグビースクール理事長）

１．自己紹介

みなとラグビースクールの黒崎と申します。先ほどの賀川さんの、日本のスポーツを支えてきたという重みのある話のあとに、私のような若輩者がお話しするのは大変恐縮ではありますが、ご縁がありましたのでご説明させていただきます。

まずプロフィールに書いてありますが、私は 37 歳になります。もともと港区で生まれまして、明治大学で中・高・大と 10 年間ラグビーをしておりました。その後、日商岩井という商社に入りまして、そのまま鉄鋼部門のメタルワンという会社に身を置いている次第です。現在は大阪におりまして、週末は毎週、東京に戻ってきています。これが私の使命だと勝手に思ってやっています。

講演に先立ちまして、後ろを見ていただくとわかりますが、この写真は私が明治大学ラグビー部のシニアコーチとしてナンバー2 をしていた時の写真です。この時はラグビースクールなんてちょっとバカにして下に見ていたのが本音のところです。ただこの後、明治大学ラグビー部のコーチが終わったあとから、ご紹介しますラグビースクール誕生に向けて移行していきます。

やはり何事もそうですが、次の世代を育てるということは本当に大切なことで、尊いことで大変なことだなと、改めてわかった次第です。

２．みなとラグビースクールの歴史

１）立ち上げ

まず、みなとラグビースクールの歴史を紹介します。みなとラグビースクールは、今からちょうど4年前、2010年の4月に、港区立青山小学校の人工芝、配布したチラシを見ていただくとわかりますが、この真ん中の大きい写真が人工芝の校庭になります。ふかふかの校庭で、皆さんご存知かと思いますけど、これが都心の青山に、猫の額程度のグラウンドが誕生しました。そのような流れの中で、日本ラグビーフットボール協会と港区が、自治体としてははじめて、2019年ラグビーW杯（当時は2015年ラグビーW杯）に向けた提携を行いました。これは日本ラグビーフットボール協会の森喜朗会長と港区長の武井正雅さんが調印して、ラグビーW杯に向けて双方の得意なところを生かしていこうという協定になっております。そして、その事業の象徴としてラグビースクールを立ち上げて欲しいという依頼が、港区立青山小学校の曽根校長先生からありまして、当時、私が日本ラグビーフッボール協会の普及育成委員を仰せつかっていたので、そこに話が来たということです。

私自身はコーチとして参画するつもりが、結局誰も何もせずに2月を迎え、4月の開校2ヶ月前に、誰もやらないなら自分がやらなきゃいけないなぁと。私の教え子たち、それから会社の仲間たちを巻き込んで、2ヶ月で任意団体みなとラグビースクールを立ち上げました。当然、スクールのマークやジャージなども、今までのラグビーネットワーク、コネクションを使って皆さんにご協力をいただき創り上げました。

２）理念の策定

一番時間を費やしたのが、運営理念、活動方針の策定です。ここに書いてありますが、「みなとラグビースクールは、ラグビーを通じて国際性豊かな地域社会の活動拠点となり、次代を担える健全な子

供たちを育成する」。いま読んでも全くブレない、4 年たっても色あせない理念となっております。

私たちの活動方針は、1 番にまず「ラグビーを楽しむ」、2 番目「どんな時も決まりを守る」、3 番目「みんなのために頑張る」、4 番目「最後まであきらめない」という活動方針でやっております。だいたい若いコーチが入ってくると、「いや俺はこうやっている」「俺はこうだ」とか、「明治のスタイルがこうだ」「慶応はこうだ」だとか言いますけど、私はラグビースクールでそこまでやる必要ないと思っていまして、この 4 つで十分だと思います。従ってスキル的なことを教えるのではなく、4 つの活動方針ですね。これは社会に出ても当たり前のことですので、これを私たちはラグビーを通じ、子どもたちに教えようという観点で育成していきたいと思っております。

3）組織

では実際、みなとラグビースクールというのはどういう組織なのかということですが、2010 年 4 月に誕生して、青山小学校の人工芝をホームグラウンドとし、幼児から小学生、中学生が日曜日にラグビーを楽しむ場所であります。小学校の校庭なので非常に狭いので、いまは前半を幼児、小学生低学年、中学年クラス、後半を小学生高学年クラスと中学生クラスという感じで分かれております。スクールに在籍する生徒は 210 名。これは日曜日ですね。そして平日夜にも、物足りない、もっとやりたいという子どもたちのためにアカデミー部門というものを作りました。これは火曜日と木曜日の夕方 6 時半から 8 時半まで行っています。そこにいま 20 名います。顧問の方々には、ラグビー界で有名な方や地域の商店街の方、体育指導員の方、ライオンズクラブの方々など、地域をあげてこのクラブを盛り上げていただいている次第です。

これが組織図です。当然、先程お話した日曜日であるスクール部門。これに生徒が 210 名おります。そしてアカデミー部門。平日火曜日、木曜日の夕方の方は 20 名おります。あとはサポート組織となっております。給料をもらっている人はおりません。全員がボランティアです。各部門のスタッフを合わせると、いま 80 名くらいです。皆様のお力添えを少しずついただいております。もちろん事務局も機能しております。

4）NPO 法人格の取得

今日のテーマである「なぜ NPO 法人格を取得したか」という話ですが、圧倒的な立地条件や大きなバックアップのおかげで、設立 2 年目にして 110 人の生徒がスクール部門に入ることになりました。当初は 35 名だったんですけど、1 年で 3 倍程度に広がりました。そこに対するスタッフや保護者、生徒を含めますと 400 名にもなりました。賀川先生のおっしゃるとおり、今後、永続的な発展を続けるには、設立時に携わったメンバー以外の方にも我々の運営理念、活動方針を伝え、理解していただき、多くの方に力を集束していただく組織にしなければならない。そのためにはより地域に密着し、効率が高い運営を心がけていくべく NPO 法人にステップアップしたいということでした。やはり NPO 法人になりますと、先程も話しましたとおり、いろんな法人業務をやらないといけないことが出てきます。各種報告業務を含めてです。ここが非常に高いハードルになるんですけど、みなとラグビースクールが法人格を持つことによって地域から認められる存在になりますので、何とか大きく広げるためにも最低限そのハードルは超えないといけない。

5）アカデミー部門の創設

2012 年度、3 年目のスタート時にアカデミー部門を作りました。これは 7 人制ラグビーのオリンピック選手を育てることが目標になっております。ここで各分野におけるプロのコーチの方々なり、優秀な成績を残された方々に入ってもらうことによって指導環境も充実させると。ここにはやはりお金がかかってきますので、必要とされる土台を作っていこうということで法人格を取得しております。

ちなみにこれがアカデミー部門の作ったときのチラシになります。

7 人制ラグビーが 2016 年のリオデジャネイ大会からオリンピック種目に採用されます。2 大会トライアウトということで、2020 年の東京も同じように 7 人制ラグビーが、19 年は 15 人制のラグビー W 杯が日本で開催されることになっております。

３．法人格取得で何が変わったのか

先程申し上げた基盤整備や財政面など、法人格を取得することによって、何が今までと違うのかという話です。組織図の中で赤く塗ってあるところが、法人格を取得して機能するようになったところです。

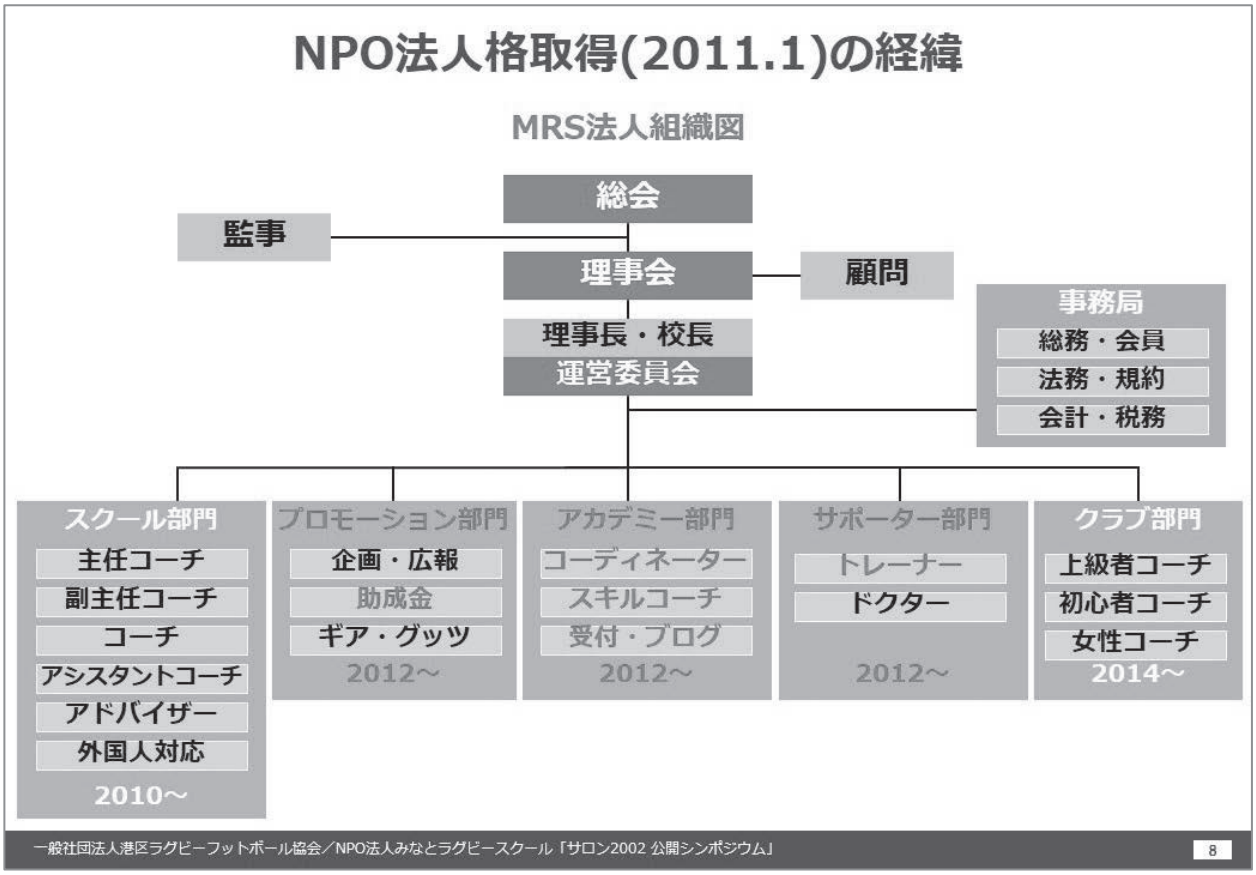
まずプロモーション部門。ここはチラシとかホームページ、いわゆる PR 機能ですね。ここを運営していく際に、toto などの助成金があるんです。この助成金は、任意団体には一切応募する資格がないものになっています。法人格を取得して、しかも 1 年間活動した上で助成金の応募が可能になるとか、100 万円使う事業のうちの 50 万円助成しますよとか、いろんな助成金があります。ホームページを見ていますと、車を買いたい、パソコンを買いたいなどいろんな項目があって、それが行政とか toto などの公の機関じゃないところ、例えばヨネックススポーツ財団とかミズノスポーツ財団のホームページを見ると、独自で助成金を募集しているところもあります。

あと先程申し上げたオリンピック選手を目指すアカデミー。仕事帰りにボランティアで参加してくれるコーチもいるんですけど、平日の 18 時半から会社を抜けて参加してもらうことですから交通費くらいはちゃんと出さないといけない。スクール部門は完全にボランティアです。やりたい人が楽しむように。しかし、ここは違うんです。なので、財務体質をここでしっかりと確立してちゃんと報酬を。報酬といってもたかが知れていますけど、しっかり出さないといけない。コーディネーターやス

キルコーチは、言ってしまえばラグビーを教えに来るだけの方なので、校庭を開けてボールを出してというのは受付担当の方。年 72 回ありますが、お母様方がつないでくれて、活動レポートをブログ形式で書いてもらっています。我々2 年間活動していますので、全 144 回、アメブロで調べれば出てきます。

それとトレーナー。トレーナーは怪我した時にお願いするのではなく、怪我をする前の予防なども行っています。例えば準備運動などです。やはり子どもたちの柔軟性、俊敏性、最近アジリティーと言われていますが、どんなスポーツにしても共通することだと思います。体が柔らかい、瞬発力がある、敏捷性が高い。そういったところをアカデミーでは、前半の 1 時間をサポーター部門のトレーナーによるアジリティープログラムを行い、後半の 1 時間を元トップリーグのラグビー選手がスキルを教えるという 2 部構成になっています。当然、トレーナーはこれで飯を食っているので、ちゃんとお金を払う仕組みにしております。

クラブ部門というのは 2014 年 4 月からです。幼稚園から中学生までラグビーを楽しむ環境、それとラグビーをしっかり学ぶ環境があって、高校生になったらラグビー部がない場合はどうすればいいですかという話を最近よくされるのですが、あとラグビーを自分でプレイしたいという方。この方々の受け皿を、4 月からクラブ部門ということでスタートします。つまり、全年齢が青山に来ればラグビーを楽しむことができるというのが、みなとラグビースクール 5 年目にして、おかげさまで整えることができました。



７．今後の展望と課題

１）一般社団法人港区ラグビーフットボール協会の創設

時代 はオリンピックやワールドカップに向かっています。ラグビーを知らない人でもオリンピックだ W 杯だと言い出してきています。これもスポーツビジネスとして当然だと思います。まだ何もできていないラグビー。去年国体がありました。16 年オリンピック、19 年ワールドカップ、20 年東京オリンピック。そして我々地元の港区は、慶応大ラグビー部の綱町グラウンドでラグビーが発祥した地でもあります。それと、先ほどご紹介いただいたように、秩父宮ラグビー場は港区にあり、それと東芝、NEC、サントリーといった企業の本社が多い地域です。これらの企業は全てラグビーをやっていますが、その他多くの企業さんが港区に本社を置いています。さらに、スポーツをするには、日本だけではできません。外国の大使館も港区には数多くあります。そのネットワークも上手く使えば生かせます。

このような背景の中で、我々MRS（みなとラグビースクール）は、港区をラグビータウンにしようという思いを抱くようになりました。秩父宮ラグビー場がある地域でラグビーを楽しむ環境をつくるとともに、W 杯、オリンピックに来る方々をちゃんとお迎えして応援したい。これは地域の方々も当然のように思うことでしょう。そして我々は、ここから将来、世界と戦える人材を輩出していきたい。港区をラグビータウンにするために我々の役割はここです。スクール部門、アカデミー部門、やはり子どもを中心とした人口の拡大だったり、五輪選手輩出だったり、ちょっと冷静に話せば遠い話、可能性をもちろん追求していくんですけど、ただ足元を見てやらなければいけないことがあるよねと。そもそもトップリーグの試合は、ラグビー好きしか見ていません。港区の中学校にラグビー部は現在ないんですよね。それ以外にも地元企業の連携や地元商店街との連携。ここを整備することよってラグビー＝港区という形になると思います。

ただ我々の領域がここだけなので、どうするのかと言うと、一般社団法人港区ラグビーフットボール協会を作ってしまいました。理事長は私です。だからみなとラグビースクールと港区協会が連携して、これから港区における地域戦略を考えると。NPO 法人だと特定非営利組織なので、お金とかそういうところでは受け入れられるんですが、なぜ NPO 法人が港区のことをするのかということをよく聞かれるんです。行政から見れば、 NPO はプライベート組織です。これをいかに公の組織に拡大して一緒に動いていくことをこれから考えていきます。

いまの話をまとめますと、2013 年 4 月、この年度の最初に戻りますと、みなとラグビースクールはこのような組織に改整備しました。そしてこの 4 月 1 日にクラブ部門の任意団体が立ち上がり、大人も楽しめる舞台ができます。そして、実際港区といろんなことをやるにあたって、NPO のときも同じだったんですけど、法人格をとっていないと契約ができません。日本ラグビーフットボール協会、港区の事業を受ける契約書を作らないといけないんですが、そこをするためにもやはり法人化が必要。そして、ここは NPO にすればよかったですが、ご存知の通り NPO は収益事業をやると色々と手続きが必要になるので、今後このことを考えて、営利活動もできるラグビー協会の法人格を取得していく。我々の上部団体に東京都ラグビーフットボール協会、関東ラグビーフットボール協会があるんですが、残念ながらいずれも法人格を持っていません。日本ラグビーフットボール協会はいわゆる公益財団法人になっています。ラグビー界はまだ全然そこまでいってないんですね。地域との連携ができていない。

2）企業とのパートナーシップ

もう一つ。港区にはたくさん企業があるんですけど、我々として戦略的パートナーシップを取りたい企業が 3 社あります。一つはアディダス。これはスポーツ用品メーカーです。もう一つはラグビーでお馴染みのサントリー。これは港区でやるサントリーホールとか、そもそも赤坂がサントリーの拠点ですので、地元の企業さんと仲良くなりたい。もう一つ、森ビルというのがあるんです。昨日、虎ノ門ヒルズがオープンしましたが、やはり港区といえば六本木ヒルズ、アークヒルズ、虎ノ門ヒルズ、森ビルがあるんですけど、ここに書いていないのは具体的な話ができていないんです。アディダスさんとサントリーさんについては提携が合意に至っています。物品の提供という小さな話ではなく、2019 年に向けて、一緒に社員の方々、携わる方々とともに、港区=ラグビーという形を作っていく。本当の地元企業さんと手を取りながら作っていこうという取っ掛かりができました。森ビルさんにまず入ってもらって、ビルの再開発とかするときにグランド作ってくださいよとか、もしくは再開発する前に土地を抑えていますよね。いまだいたい駐車場なんですけど、都心の港区は、東京タワーの真下にたくさん駐車場あるんですよ。それも土日や観光シーズンには必要なんですが、是非子どもたちのために人工芝敷いてくださいよ、ということを、アディダスさん、サントリーさんとやっていこうと思います。

3）スクール部門・アカデミー部門・クラブ部門の棲み分け

そして、来年の 2015 年 4 月、ここに我々は大きな変化を行います。今までスクール部門も、これは日曜日なんですが、これを単独で NPO 法人として都のボランティアを追求するスクール部門=みなとラグビースクール 1 部門にのみ残します。

アカデミー部門、これはオリンピックを目指している機関なんですが、これを協会下におきます。

青山セブンスアカデミーとして。これで何ができるかというと、我々の上部は日本協会、関東協会、東京協会と縦の繋がりです。現在、我々が NPO で勝手にやっている 7 人制の若年層向けの強化を、日本協会と直結連動した、いわゆる強化養成機関にすることができます。

同じようにクラブ部門。大人でもこれを協会の傘下に入れることによって、サントリーさんといった地元企業とより近い関係でやっていこうと思っています。

３）行政と企業とのパイプ役に

それ以外に、これが企画書ですが、港区と地元の企業、サントリー、NEC、東芝、ラグビーに強い企業がたくさんありますが、アメフトとかでも鹿島、富士通、東京ガス、この法人の企業さんのいわゆる CSR 面の活動を港区協会と一緒に地元に広めていきましょうと。ラグビーじゃなくても、とにかくスポーツを身近に感じて、スポーツを通じて健全な青少年の育成ができる環境を、我々みなとラグビースクールと協会は作っていきたい 。そして、実際調べてみたところ、インドア、アウトドア両方あるんですが、サントリーはラグビー、富士フィルムはバレーボール、日通は相撲と、いろいろあるわけです。我々はこの企業面をいかに 2020 年の五輪のラグビーに向けてコネクションを持つか、そして 2019 年 W 杯、2020 年の五輪に向けていかに連携させていくかを真剣に考えています。

４）合同部活動としてのラグビーの可能性

最後になりますが、先ほどお話に出てましたけど、地元港区の中学校にラグビー部がありません。一校だけだとなかなか生徒も集まらないんですが、合同部活の形で、オール港区のラグビー部を作って部活としても展開していきたい。ラグビースクールとはちょっと違ったコンセプトになりますが、地域を象徴するスポーツに作り上げてきたい。これも港区協会の仕事として捉えていきたいと思います。

５）地域との連携

先程申し上げた地域との連携は、青山共育プロジェクト、プログラムということで、話が長くなってしまいましたが、NPO 法人の枠からもうちょっと飛び出たことを真剣に、2019 年、2020 年に向けてやり始めました。皆さま方にいろいろお力添えをいただききながら、なんとか将来お役に立ちたいと思います。もっと広い意味で、港区でラグビーというカテゴリーを仲間、そして家族を増やしていきたいと思います。

こういうことをやっているよという思いを皆さんちょっとずつ持っていただき、いろんなことを情報共有しながら、各スポーツ、ラグビー以外のスポーツも含め、2020 年に向かっていければいいなと思います。

以上です。ありがとうございました。

中塚：ありがとうございました。サロンの月例会でもラグビーを取り上げていましたし、シンポジウムでも取り上げたことがありますが、ラグビーの話を聞いていると 2019 年の W 杯は本当に大丈夫かなという話ばかりだったのですが、初めて 2019 年に向けてのポジティブな、こういう動きがあるんだなという話をお聞きしました。すごくいい話だと思います。
まず皆さんの方から質問等ありましたらどうぞ。

◆質疑応答

１）収益事業の扱いと企画スタッフについて

名方（文京ラグビースクール）：話を聞いて 2 つあるのですが、NPO の場合は収益を出してもいいんだけどめんどくさいとおっしゃってましたよね。それは具体的にどういうところでしょうか。もう一つは、これだけの企画をされたということは、企画スタッフという方々がいらっしゃるのかなと思ったのですが、どのように決まっているのかについてお尋ねします。

黒崎:一番目の質問の収益事業についてですが､ラグビースクールのジャージって決まっていまして、それを再販と結局､利益がないように仕入れて親御さんに売ってもこれは収益事業になります。ですので、ユニホーム作って売る、それだけでも一人ボランティアつけなきゃいけない。なおかつ決算業務も含めて全部調べられるってことに関して、我々は手間を掛けることができないという判断で、完全にアウトソーシングしました。アウトソーシングの契約は、ライセンス契約という形をしています。業務委託にしても、どうしても我々の収益中に入ってきてもおかしくない話ですので、我々のロゴマークを使う権利を業者さんに渡して、そこで全てやり取りをやってもらうという形です。あと収益という意味では、パーティーとかありますよね、卒業生を送る会とか。それとかもやはり会費を取って、利益を起こすような形はできないので、あくまでも。ホテルでやった場合、だいたい一人当たり 4000 円ほどかかるんですけど、それを 3,000 円とか子どもは 500 円にして、我々は客に補填をする形で運営はしております。

もう一つの企画については、実はプロモーション部門で作っております。部門長が、港区にあるコンサルティング会社の役員さんなので、お子さんがみなとラグビースクールにいらっしゃる。携わってくれる方には、ご自身の得意なところをちょっとずつ活かして頂きたいと常にお話しております。

２）居住地と所属クラブ

小栗（東京高師附属中 OB）：港区の場合はグラウンドとかスポンサーが恵まれていると思います。将来的に、東京の中でも、仮に世田谷区、文京区とか、いくつか出てくると思うんですけど、どちらにも属さないけれども俺はラグビーをやりたいんだという場合は、住んでいる地区に関わらず、他の地域、例えば中野区に住んでいても港区のクラブに入れるんですか？　それは関係ないんですか？

黒崎：はい、関係ありません。子どもたちに限ったことかもしれませんけど、こういう指導方針をしているんだっていうのが各クラブで違うんです。少し突っ込んだ話をしますと、本来、日本ラグビー協会が中学校までのラグビー教育をここまでやってくれ。これ以上やらなくていいという指針があればいいんですけど、それがないんです。したがって、現状のラグビースクールの中でも「おいこら、お前何やっているんだー」っていうところもあれば、ミスしても「次頑張ろうね」と、本当にピンからキリまであります。実際、それを親御さんたちはどこに行こうか体験しながら、子どもにどこまでラグビーをやらせようかという思いを判断材料にして入れている傾向もあります。我々は現在 210 人います。都心で環境面が素晴らしいと思っている方が半分いるかもしれませんけど、それとラグビー楽しめばいいんだという親御さんも半分いるかもしれません。やはり近くて便利というのが、継続するにはとても大事なことので、私は港区でモデルケースを作って何とか他の地域に展開できるようにしたいなと思っております。

中塚：質問者の小栗さんは、私が勤務している筑波大学附属高校の前身の東京高師附属中学サッカー部の大先輩でいらっしゃいます。戦後すぐ、1946 年に神戸一中と附属中が御殿下グラウンドで日本一をかけて戦った時の監督さんでいらっしゃいます。当時の学生監督ですね。今日は賀川さんとのご対面がすごく楽しみでした。

小栗純二さん（左）と賀川浩さん（右）

３）NPO 法人化にあたっての会員の定義

中塚：私からも二つ質問させて下さい。１つは、みなとラグビースクールの「会員」は、任意団体だったころと法人化した後でどう変わったのかということです。任意団体時代の会員は、参加している子どもたちのことを指していたと思います。それが NPO 法人になってどうなったのか。なぜこういうことをお聞きするかというと、我々のサロン 2002 のメンバーで、かながわサッカークラブの法人化に携わった方がいます。かながわクラブは、サッカークラブの NPO 法人化第 1 号なのですが、NPO になってまず変えたのは、会員の位置づけだったと。任意団体のときの会員は子どもたちだったけど、NPO 法人化後は、子どもたちはサービスを受ける側、つまり顧客であると。それを動かしていく大人たちが会員、法的には「社員」です。このように会員の位置づけを大きく変えたとおっしゃっていました。みなとラグビースクールの場合はどうなんでしょうか？

黒崎：はい。まさにおっしゃる通りです。実は NPO の社員というのは、我々の運営組織とはまた違っています。NPO なので理事や理事長という役職者はいるのですが、社員はそれとも違うんです。実際に来ている子どもたちとも違います。NPO の社員は誰でも受け入れなければならないという性質があるので、親御さんでもコーチでも地域の方でもなんでも社員にはなれます。ただ、理事以上の方は、当然総会で決まるのですが、みなとラグビースクールがこれから発展するに

相応しい方になっていただきます。なので、社員からは毎年会費を徴収していますけど、必ずしも理事の方からは徴収していません。なぜかというと、我々の活動のためにご尽力していただかなければならない方々がいらっしゃるので、そういう方には逆に理事というポストを用意しております。社員ではありません。もちろん社員になる方もいらっしゃいますが。

あと、社員とコーチは全くの別組織です。我々には運営委員会という組織があるのですが、総会があって理事会があってその下に運営委員会があり、そこで日々の議論をしています。私の直轄の下に運営委員会があって、毎月スクールの前にやっているのですが、今まで第48回までやっています。ここでスクールのはかりごとは全部決めています。そして理事の方々には、運営委員会で決まった議事を毎月お送りしています。運営委員会には総会の方は出てきません。現場の方だけです。社員は総会ですよね。理事は理事会です。運営委員会で主任コーチ、副主任コーチ、各部門長が全部出て、あと理事も現場に近い方には出ていただいて、そこではいろんな議論を、決めごとをしています。

4）ホームグラウンド

中塚：もう一つ。秩父宮ラグビー場のあたりは、国立競技場の改修でかなり大きなスペースを奪われてしまうと思うのですが、みなとラグビースクールのホームグランドは大丈夫でしょうか？

黒崎：ありがとうございます。いま我々が実際やっているのは、クラブができましたので、組織としてプレーヤーだけで500人以上います。2014年は青山小学校でやる前提ですが、クラブも、2015年には、これを青山中学校に変える。青山中学校、実は人工芝じゃないんです。けど、いまの青山小学校のグラウンド8倍あるんです。いま、教育委員会と東京都にお願いしているのは、これだけの組織になって、なおかつ秩父宮にいちばん近い中学校が人工芝じゃないのはおかしいじゃないかと。合同部活、これは港区のためにやります。共育事業、これも港区のためにやります。我々にホームグランドをくださいということで、何とか大きいグラウンドを手に入れようとしています。

結局、秩父宮の改修は2020年以降になるので、2019年に向けてそれだけの活動ができれば、日曜日スクール、火曜日アカデミー、水曜日クラブ、木曜日アカデミー、土曜日クラブで、空いているところに合同部活が入れれば、月曜から日曜日、青山に来ればいつでもラグビーができる。皇居ではみんなランニングしていますよね。それと同じように、青山に来たらいつでもラグビーができるというまちづくりをするための話し合いを一生懸命しています。

あと、いま我々がやっている事業を他の地域に展開するか、港南地区であるとかそういうところに小学校さえあれば、我々は人もいますしノウハウもあるので、場所さえあればどこでもいいんです。場所を作ってください。サッカーとか野球とかスポーツ少年団とか、皆さん良いところがありますので、なんとかラグビーということで売り込んでおります。予算が通らないといけません。人工芝にするには8000万かかります。2015年夏には人工芝になっていると思うんですけど…。

5）運営資金の確保とスポンサーメリット

河原（株式会社IC Net）：お金のことに関する質問です。運営する資金の内訳、だいたい会費がこんな感じで、スポンサーの助成金がどういった形で分散しているのかということを教えていただければと思います。特に企業からご支援いただいている場合、企業側から、スポンサーになってよかったなあというような声を聞かれていれば教えてください。私もいろんな企業をまわる

機会があるのですが、こういうことでこういうメリットがありますよというのがあれば参考になりますのでお願いします。

黒崎：我々の収益の 1 番大きいのは、やはりスクール部門になります。年会費 12,000 円。これを会員 210 名から頂いております。あとアカデミー部門。これは年 72 回あって一回 1,500 円ですが、月額 9,000 円ということで、ほとんどスクール部門は支出がありません。お金がかかるのはアカデミー部門です。ただスクール部門の金額をこちらに振り変えることによって、一応指導環境は整備されております。

助成金とか企業さんとの付き合いですが、助成金は、実は正直言ってプラスになりません。7 人制ラグビーの指導教本作成事業として港区から 50 万円いただいております。助成金を 50 万円もらうのに対し、実際の支出は 60 万円かかっています。やれ報告書だ、送らなきゃいけない、告知しなきゃいけないと、本当に手間がかかるんです。ただそれは、団体が信頼性のある認められた審査をくぐった活動しているということを示すためにやっています。

企業に関してはこういう言い方をしています。我々Win-Win な関係を目指しています。例えばアディダスさんが我々にアプローチをしてきてくれるのであれば、当然港区に本社のあるアディダスさんのジャージを作りますよと。4 月からジャージは全てアディダス製になります。サントリーに関しては、地域貢献にすごく積極的です。CSR 部隊があって。

ラグビーの方でどのように CSR をやっているのかというと、グラウンドがあるところだけなんですよ。府中にグラウンドがあるんですけど、そこの子どもたちには相当な還元をしている。ただ、なかなか見えないし、ホームページを見ても、自分たちの得意なことをやっているんでしょとか。

一方で、我々港区協会が間に入ることによって、区とのコネクションができます。彼らは地域に対してどうやってアプローチするか、特にアディダスなんかは真剣に考えているんです。我々が港区役所に、本社のある企業さん、港区にゆかりのある企業さんを連れていき、こんなことやっていただいていますとか、区が地域内でこういうことを企画するのであれば、我々がサントリーさんを連れていきます、アディダスさんを連れていきますというような話を、我々が間に入ってする。地域戦略という意味では実りある活動になると思うんですよね。サントリーさんやアディダスさんは大企業ですから、そこで一回事例ができると、サントリーさんがやりましたとか、CSR の繋がりが広がってきます。実は行政は非常に企業と遠いんです。

６）クラブ部門の今後

嶋崎（帝京高校）：自分は高校ラグビーに関わっていますが、部活動が現状として衰退している中で、チラシにあるようなクラブユースのようなものが求められていくと思います。例えば今度の 4 月に立ち上げるチームのプレ練習会にはどれだけの人が参加する予定ですか？　どれだけ参加すると見積もっていますか？　女子の参加についてもお願いします。

黒崎：参加人数は 42 人で、女子は 5 人です。年齢は、上が 64 歳で下は 15 歳。これからクラブとしてやっていくなかで、この幅広い年齢層とレベルをどういったカテゴリーに分けて楽しんでもらうかということを、クラブ部門長を中心に考えていこうと話しております。将来的には、みなとラグビースクールのクラブ部門が 7 人制の全国大会であるアシックスカップに出場するような組織にしていきたい。そのためには、部活じゃない、様々な理由でラグビー部に入らなかった子どもたちをいかに吸い上げていくことが課題です。これは高体連といがみ合うようなことじゃないし、しっかり共存共栄していきたいと考えます。

ラグビーアカデミーには来年度、斉藤祐也君という、私の一歳下の後輩がいるんですが、奥さんが岩崎恭子ちゃんといえばわかると思います。そういう優秀な人材が、72 回のうち 36 回は来てくれることとなっております。いわゆるプロに上がった人たちがこれからラグビー界には出てきます。ただそういう人材を活用する場がないんですよ。だから、私はここで得意なものがある人たちをつなげていくことが、2019 年に向けた強化になると思うんですよ。

黒崎祐一さん

水上博司さん

Ⅲ．クラブ文化と認定NPOを語る

水上博司（NPO 法人クラブネッツ副理事長／日本大学）

１．はじめに

１）自己紹介

皆さんこんにちは。クラブネッツの副理事長の水上と申します。初めての方がほとんどなので、少し自己紹介させていただきます。

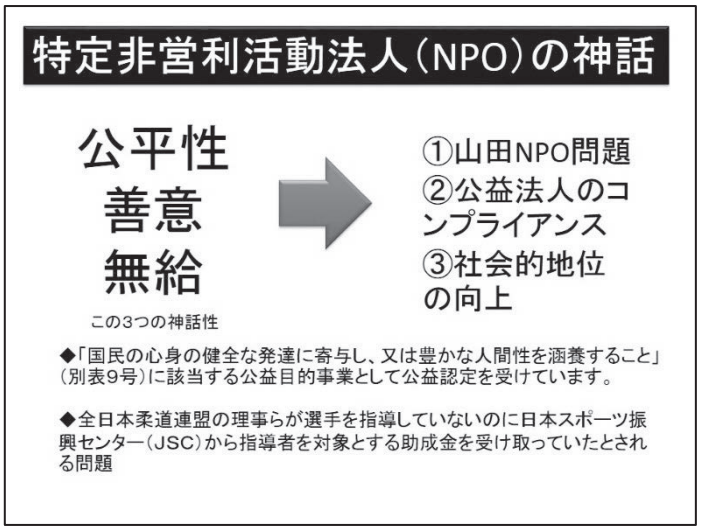
職場は日本大学で、体育の教師をしています。体育学科というところで体育の先生を目指す学生たちの指導を行っております。そういうことをしながら、クラブネッツという法人の事務局をさせていただいています。賀川さんと黒崎さんの話は、活動拠点を持っているクラブの法人化とその運営だったと思います。クラブネッツは、活動拠点を持たない法人ですので、少しこれまでの話とズレがあるかもしれません。サッカーとの関わりは、公認スポーツ指導者の A 級・B 級の「スポーツと社会科学」の科目を担当したことがあるぐらいで、サッカーをプレイしてきたわけでもありません。

本日は、サロン 2002 が法人格取得の準備をされているということですので、クラブネッツの運営をとおして考えていることを話したいと思います。

２）特定非営利活動法人の神話

まず、「公平性」「善意」「無給」について、この三つは NPO 法人の運営の基本原則のようなこととしてよく使われる言葉です。原則であることには間違いありません。ところが私は、NPO 法が公布されてからずいぶん経って、この 3 つの言葉に込められた神話が大きく変化していると感じています。

まず「公平性」です。NPO というと、公的サービスの受益者は、広く公平にターゲットを考えてしまいがちです。しかし、NPO の活動でたいへん注目されている事例を眺めてまいりますと、病児保育事業を展開しているフローレンスという NPO が活躍しているように、対象者は子育て中の親御さんをターゲットにしています。ターゲットは限定的です。受益者と成果、これははっきりしています。こうした事例は数多く、生活困窮やアルコール依存など、さまざまな社会問題を抱えているマイノリティに限定した事業が展開されるようになっています。つまり、受益者はかなり限定的になってきています。



次に「善意」という気持ち、これはたいへん大切なことですけれども、それにプラス「専門性」が求められています。いろいろな社会問題の解決に対応するため、NPO では高い専門性を有する人材を雇用し、人材育成にしっかりとしたノウハウをもっておくことも必要になってきています。つまり「善意」をベースにプラス職能の開発が、組織内部で体制化されていることが重要にもなってきます。だれもができるというものではないということです。

そうなってきますと、そこには「無給」スタッフを雇用することで責任の不在があってはまずいわけで、責任と役割を明確化した「有給」スタッフを雇用すること、これが必ず求められるのはいうまでもありません。

そんな高い専門性と事業性を備えたNPOが活躍している一方で、NPOが社会的な信用を損なう出来事も少なくありません。多額の補助金を不正受給するという問題、震災復興に関係して、新しいところでは青森県の「山田NPO問題」は、大きく報道もされました。スポーツ界も例外ではなく、競技団体でも、使途不明金がtoto助成金に関わってでています。

このように最初に言った三つの言葉に込められた神話が揺らいでいるとはいえ、「公平性」や「善意」や「無給」といったNPOの精神は、NPOをめぐる社会的事件がおこるたびに、また別な意味で揺らいでいるのだと思います。

２．クラブネッツの設立と総合型地域スポーツクラブ

クラブネッツのことについて紹介をしたいと思います。クラブネッツの始まりは1998年5月、黒須充さんという福島大学（現在は順天堂大学）の先生と私の2人でニュースレターを発行したことからでした。総合型地域スポーツクラブづくりに、もっと現場のクラブ関係者の声を下から吸い上げるためのネットワークを作ろうというボトムアップの関係づくりを仕掛けることが狙いでした。あらゆる場でこのニュースレターを配布して、呼びかけました。すると、全国各地から想定以上の反響があり、当時1000円購読料をとっていたにも関わらず、600人くらいの購読者になってくれました。

その後、法人格を取得したのは、1999年7月。福島県が所轄庁です。ちょうどこの頃からメーリングリストが情報ツールになってきましたから、コストと手間のかかるニュースレターは廃止して、メーリングリストに切り替えた普及啓発活動をしてきました。その他には、朝日新聞社と協働で、3回にわたってスポーツライフシンポジウムもしましたし、2002年には大修館書店から「ジグソーパズルで考える総合型地域スポーツクラブ」という単行本を出版しました。

それから15年。現在、法人格を持っている総合型地域スポーツクラブは543団体。総合型地域スポーツクラブ総数が3493ありますから、約15%が法人格を有していることになります。さらに、そのうちの152の総合型地域スポーツクラブが活動拠点になる公共スポーツ施設の指定管理事業者になっています。

３．休眠法人だったクラブネッツ

全国の NPO 法人の 3 割程度が休眠法人となっているという報告があります。設立はしているけれども、所轄庁への事業報告をしていない、理事会が機能していない、というケースです。実は、クラブネッツも休眠法人に近い状況が震災前にありました。

なぜ休眠状態になったか、いろいろな理由が考えられますが、自己分析をしますと、（1）ミッションの再構築に失敗があります。私どものミッションは「日本にクラブライフを実現する」としていますが、これは一体どういう具体的な成果を出すのか曖昧なもので、説明もしにくいものでした。二つ目が（2）事務局が機能しなかったことです。事務局を 3 年ほど移転していましたがほとんど機能しませんでした。三つ目は（3）仕組みに入れないということ、ちょっとわかりにくいのですが、つまり、政策立案のプロセスに、総合型地域スポーツクラブの下からの声をくみ取って活かしていくしくみを作れなかったことです。四つ目は（4）会員を活用できなかったこと。最後五つ目が（5）新しい SNS の仕組みに対応できなかったことがあげられます。

こんな理由で休眠状態になってしまったところで、あの大震災を迎えました。震災の被害状況が刻々と伝えられようとしている中、クラブネッツのメーリングリストには、数多くのメールが投稿されます。当時、クラブネッツのメーリングリストには 580 アドレスが登録されていました。投稿の内容は、どれもクラブネッツから直接全国の総合型地域スポーツクラブへ支援を呼びかけて、支援の和を被災地に届けてほしい、というものでした。

こうした声を受けて 6 月 1 日「子どもスポーツ支援プロジェクト」をスタートさせます。どんなプロジェクトなのか詳細は省きますが、簡単に言えば、全国の総合型地域スポーツクラブから支援金を受け取る体制を整え、それを被災地の子どもたちのスポーツ活動に活かすというものです。現在では集まった支援金の総額が約 670 万円、配布金額は約 480 万円、奨学金として受け取ってくれている子どもは 6 名です。

その他にもセミナーをやったり、ブックレットをつくったり、調査をしたり、いろいろとありますが、まずはざっとクラブネッツを紹介させてもらいました。

さて、ここで総合型地域スポーツクラブのことに戻りたいと思います。ご存知のとおり、総合型地域スポーツクラブは、文科省をはじめ日本体育協会、地方体育協会の他、競技団体も企業もこのクラブづくり政策を後押しして、ちょっと大げさにいえば日本のスポーツ界の構造改革に取り組んできました。その成果といえば成果ですが、数量的にはクラブ総数は 3,500 にもなりました。これだけの数になりますと、SNS を使ってクラブマネージャーらの小さなコミュニティがあちこちに誕生していきます。中には、クラブマネージャー間の勉強会をやったり、プレゼン検討会をやったり、シンポジウムや講演会を開催できるような能力をもった集まりもたくさんできているようです。ゆるやかなネットワークを形成して、そして無理のないところで学ぶ機会をつくっています。クラブマネージャーのなかには、講演会の講師をつとめたり、シンポジウムでたいへんすぐれた事例発表ができるような人も少なくありません。つまり、それらのネットワークで自分たちで人材育成をしている、ということが言えます。これまでネッツが取り組んできた普及啓発事業、セミナー事業のようなことを自前で SNS

を活用して、どんどんやっていくわけです。もうネッツの出る幕ではないな、と真剣に思ってしまいますし、ミッションを再構築しないとだめだな、ということを真剣に考えるようになりました。

４．ミッションの再構築

最初にも言ったように、クラブネッツは全国をエリアとする中間支援組織です。活動拠点をもっているわけではありません。しかも、もうすでに、クラブマネージャーらの連帯といいますか、ネットワークはできつつあり、互いの向上心を刺激し合う関係も作れているようにも感じます。

そんな中、クラブネッツという組織に、いったいこれからどんなことができるのか、具体的なアイデアを絞り出して、いくつかの助成金や補助金の申請で提案を繰り返してきました。ヒヤリングを受けたり、スポーツとは畑違いの NPO の話を聞いたり、アドバイスを受けるようなこともたびたびありました。

そこでよく言われることは、「クラブネッツは全国 3,500 のクラブの支援をしていますが、いったい具体的にはどんな効果があるのか」ということでした。クラブマネージャーという人たちが総合型地域スポーツクラブで活躍しています、といっても、それはクラブネッツが独自に育成した人たちではなく、日体協の仕組みのなかで育成され、クラブに配置された人ですから、それをクラブネッツの成果とするのはおかしい、というふうに言い返されます。たしかに、スポーツ以外の他の NPO の人材育成は、NPO が独自に選抜、育成、派遣し、その活動をちゃんと評価するという仕組みを作っています。そういうことが人材を育成したことの成果として認められるのですから、クラブマネージャーをクラブネッツのネットワークの一員です、ということを、成果として捉えようとすることは、ちょっとおかしなことになってしまうわけです。

他によく尋ねられることは、「総合型地域スポーツクラブは、地域づくりに貢献している、ということですが、具体的にはどんな地域づくりの貢献がありますか」ということです。「地域に貢献しているクラブっていうのなら、児童虐待や飲酒事故防止など、そんな社会問題取り組んでいる総合型地域スポーツクラブってありますか。」という質問は、たびたびあります。クラブネッツは、それらに具体的に貢献しているクラブが全国にどれだけあるのか、データを持ち合わせているわけではないので、答えられません。そうすると、「じゃあ地域づくりといっても明確な成果がないんですね」となります。それぐらいはっきりしています。

日本社会の課題

震災復興　晩婚化　未婚化　人口減少　貧困連鎖　超高齢化社会　買い物弱者　孤独死　少子化　介護問題　雇用不安　フリーター　生活困窮　ホームレス　子どもの貧困　教育格差　児童虐待　児童労働　子育て　待機児童　育児放棄　不登校　心の病　うつ病　長期休業者　自殺　ひきこもり　飲酒事故　薬物依存　肥満　生活習慣病　借金　環境問題　農業後継者　休耕田　後継不足　商店街活性化　景観　空家活用　緑地化　災害対策　エネルギー問題　ごみ問題　食の安全　おれおれ詐欺　個人情報　学校裏サイト　携帯依存　父子母子家庭　外国人労働者　ブラック企業

「１クラブ×１ソーシャルgood」

ソーシャルグッドとは、社会問題を解決するための取り組みを総称し、社会にとって役立つ（グッド）ことをすすんで行う実践のすべてである。

現代日本の社会問題

NPO　NGO　行政　専門家　中間支援組織

こうした「社会問題」に対して
総合型地域スポーツクラブには何ができるのか？

５．１クラブ×１ソーシャルグッド

そんなことがたびたびあり、ミッションを今後どう描くのかについてずっと考えてきました。しかも、ネッツだからこそできること、他のス

ポーツ組織にはできないようなことをやらないとだめですし、成果もはっきりと目に見えるものでないと思います。

そこで、私たちは「１クラブ×１ソーシャルグッド」という理念に行き着きました。日本社会にこんな問題があります、ホームレス、児童労働、待機児童、心の病、薬物依存、農業高齢者、介護労働弱者。いま本当に NPO が成果を出さなきゃいけないのは、実はそういう社会問題を抱えている人々がスポーツをとおして、どんなふうに克服できるかというところではないかと私は思っています。ソーシャルグットというのは、社会問題解決に向けて、社会に役立つグッドを進めることです。

成熟した日本の社会のなかで、スポーツという価値が、クラブという人々のつながりをとおして、社会貢献をも含むということ、これがクラブの社会的地位の向上に結びつくのではないかと考えています。ありがとうございました。

中塚：ありがとうございました。最初にも水上さんが仰いましたが拠点のあるクラブではなく、そのクラブをつなげていく志で立ち上がったネットワークです。それが、途中、社会情勢の変化の中で、なかなかミッションの再構築ができず休眠化していくプロセスを、サロン 2002 とだぶらせながらお聞きしていました。思い当たるところがいろいろありました。

◆質疑応答

休眠状態だったネットワークと東日本大震災

中塚：実質的に水上さんが事務局長されているという事ですけど、休眠状態なる頃の話として、どういった形でそのネットワークは活用されていたのですか。

水上：休眠状態のネットワークは、メーリングリストとホームページだけでした。でも、こうしたツールを絶やさずにずっと運用してきたことが、大震災の支援活動につながったのだと思います。

中塚：クラブネッツ立ち上げがちょうど 90 年代の終わりころです。かつて JCY（日本クラブユースサッカー連盟）のシンポジウムで、水上さんにもクラブネッツ立ち上げのころのお話をしていただきました。また、サッカー協会の指導者養成講習会で「スポーツの社会科学」を一緒に担当していたときには「スポーツクラブの法人化」についても講義をしていました。実はそれぞれ、休眠状態であったり、法人化への一歩が踏み出せないでいたり、いろいろ悩みを抱えていたわけですね。クラブネッツの場合は、東日本大震災がきっかけとなって、これまでつくってきたネットワークがいろいろな形で機能したわけですよね。

水上：ほとんど投稿のなかったメーリングリストを、年間27,000円くらいコストがかかりましたけど、ずっと残しておいたのは良かったのかなと思っています。

中塚：震災の話で言うと、先程も紹介された塩釜 FC が、地域の情報を発信したり支援物資の受け皿になったという話もありますね。やはり地域で長いことやっているだけあって、究極の場面で地域の受け皿になるということですね。
はい、それではとりあえず、まず第一部はここまでにしておいて、10 分間休憩の後、後半戦に向かってきたいと思います。水上さんどうもありがとうございました。

Ⅳ．ディスカッション

中塚：お三方の話は本当に面白すぎて、一つひとつが非常に中身の濃い話だったと思います。ただ、この会は 16：30 までとなっており、残り時間がかなり限られています。

後半戦はまず、3 名の演者の方々に、それぞれのプレゼンを聞いて感じられたことを、感想でも、各演者への質問でもかまいませんのでまず出していただき、その後にフロアのほうへ投げかけようと思います。まずはお三方のプレゼンについてのディスカッションです。そのあとで、こちらとしては「サロン 2002 の法人化」について演者の方々からご意見をいただきたいので、そのテーマを取り上げたいと思います。

では賀川さんから、黒崎さん、水上さんの話を聞かれてのコメントをお願いします。

１．各演者からコメント

賀川：港区の小学校のラグビースクールの話は、昔の自分たちの創業時代を思い出して、非常に懐かしい感じがしました。「港区」と、「区」に入れたというのは非常に大きい。いまは日本中の各市にサッカー協会ができているはずではありますが、兵庫県では神戸市が一番早くサッカー協会ができた市であり、力も一番あります。この前、芦屋市で芦屋在住のサッカーの功労者という事で、J リーグの鹿島の住友金属の新宮さん、それから日本ハムの大社さんと、ガンバ大阪の初代社長の山田さんと集まり話をしました。いわばトッププロチームの初代社長であったり創った人であったり、オーナーであったり、お金を出した人であるのですが、3 人とも口を揃えて言ったことが、トップで凄いことをやってはいるけれど、J リーグの試合を観に来てくれるのは、子どもや大人がお金を払って観に来てくれるようにサッカーを普及した、芦屋市サッカー協会などの努力のおかげである、といったことでした。子どもまで面倒をみようと思うと県協会ではできません。県協会は年間にたくさんのチーム試合をこなしていかなくてはいけません。そこで子どもまでの面倒を見ようとなると、市にも協会をつくることが必要となり、そこまでおろさなければなりませんでした。

この前、レフェリーの講習会に出たのですが、その時もすごい人数で感心しました。そのようなことはやはり市や区がやらないといけないことです。僕は東京に出てきて、関西と違って東京はアベノミクスの効果もあるようで世の中が少し賑やかな気もするのですが、その東京のような、全国からお金が集まっている所で、特にラグビーのようなこれから盛んにしなければならない競技で、区民を対象にしたそのようなスポーツ組織を創っていくことは非常に有効なことであると感じました。この役割を果たすのは、兵庫県や田舎においては各市となります。東京の場合は区が大きな存在であり、それぞれがお金も持っていてしっかりしているので、区の力は非常に強いうえ、役所の人たちはスポーツというところで名前が出ると非常にいいことをやったような感じになってくれるので、これは非常にいいやり方であると感心しました。

中塚：ありがとうございます。黒崎さんお願いします。

黒崎：賀川さんと加藤先生がおっしゃっていた、市営の競技場、クラブハウスから作ったというのは、まさに私がやろうとしていることであり、そこまでいけたらいいなと思っていることなので、その前例がサッカーにあるのだと。これはもう、やるしかないと思っておりまして、とても勉強になりました。クラブネッツはそのようなクラブにもご支援いただければと思います。NPO

のための NPO があるということを、実は今日初めて知ったので、このような繋がり、機会をいただけたので、お互いが広めあい、そして良い関係で次の世代に何かを残せるような組織づくり、仕組みづくりを考えさせていただければと思いました。ありがとうございます。

中塚：では水上さんお願いします。

水上：元三重県知事である北川知事が、「NPO はミッションオリエンテッドである。何を成果にするか、何をミッションとするのかが一番大切で、組織の戦略はミッションオリエンテッドでなければならない。なので、組織は過去の慣習だとか、縛られたルールなど、前例にとらわれないミッションの到達を目指した活動が必要である。」ということを盛んにおっしゃっています。本日の港区のラグビーのお話を聞いていて感じたことは、「港区内には一校もラグビー部がないという社会問題に対して、みなとラグビースクールが、この社会問題を克服するために設立された法人である」とミッションを達成するための組織づくりと活動が行われていると思っています。ルールオリエンテッドではない、ミッションオリエンテッドな組織をつくっていくかが大きな課題でもあり、それだけミッションが大切だということです。

中塚：ありがとうございます。公益性となると、「みんなに等しく」といったような感じで捉えられがちであり、もしかすると本来それは行政がすべきことであるかもしれませんが、もっと特化したあるトピックに対しフォーカスした取り組み、ミッションを掲げるような組織が必要なのではないか、というようなご提言をいただいたかと思います。

水上さんの前半部分の話が、おそらく途中で終わっていたかと思います。認定 NPO に関するスライドが出ていますが、そのあたりを続けていただいてから、フロア全体へと投げかけていきたいと思います。

水上：クラブネッツは認定 NPO 法人をとるために、まず「ふくしま認定 NPO を目指す会」に加盟しました。この会の勉強会に参加したことが認定取得のスタートになります。その後に東京ボランティア市民センターの NPO セミナーを定期的に受けて NPO マネジメントの勉強のし直しをします。このセミナーで出会った人たち、それはほとんどスポーツ以外の NPO の人たちでした。名刺交換をして少し仲良くなり、いろんな話をしますが、これまでのスポーツの価値観を大きく揺さぶられることがたびたびでした。こうした出会いがなければミッションの再構築の発想につながらなかっただろうと今は思っています。

中塚：ありがとうございます。おそらく大変な苦労のごく一部しかこの場では披露できないのだろうと思いますが、我々もサロンの法人化の話をしているときに、認定 NPO をとり、企業からの支援を得よう、などと漠然と考えていたのですが、もっと突っ込んだところまでいかないと、意味のある関係には繋がらないだろうということですよね。では、賀川さん。

賀川：私も今までいろいろなことをやってきましたが、その中の 1 つに、ランニングイベントがありました。道路を使用するための警察との交渉が難しいのですが、新聞社がサポートすればできることもあって、大阪女子マラソンもその 1 つです。さらに、ものすごくたくさんの人が走るニューヨークマラソンからヒントを得て、一般の人向けに、当時から流行っていたジョギングの大会のようなものを阪神間で 4 つ行って、いまは 3 つ残っています。そこでは、参加費の中から何%かをユニセフへと寄付するということをやっています。走ることで予防接種が受けら

れるようになり、子どもが助かるのです。もう 30 年も開催されています。

ここで少し年寄りの嫌味を言わせていただくと、大震災の時にある野球選手が「スポーツには力があるのだ」ということを言い出してから、やたらとスポーツが人を感動させるだとか、スポーツによって人に力を与えるだとかいうことを、選手側が言い過ぎている感じがあるように感じます。自分たちはプレーするだけであって、それを見た人が感動してくれるのならば結構だが、実際には感動できない試合をたくさんしているわけで、それに近い、押し売りみたいなものが最近多く感じるので、選手の発言にも指導者が注意してもらいたいと思っています。

9.11 の後にアメリカの大リーグの選手が言ったのは、「私たちはスポーツをすることしかできない。ただスポーツをして、国民の方々に観てもらうだけだ」ということでした。心の中で、スポーツを通じて喜んでもらえればありがたいと思っているわけです。しかし最近は、自分たちがいいプレーをするから感動しろ、自分たちが力を与えるんだ、などと、自分たちが力を与えるような試合ができたと選手が平気で言うんです。そういう人たちよりも、2,000 円の参加費を払って 100 円の寄付をし、恵まれない子どもたちのために走る一般のランナーのほうがずっと貢献していると思います。ちょっと嫌味ですが。

中塚：ありがとうございました。大切な視点だと思います。
では、フロアのほうから何かありましたらお願いします。どんな観点でも構いませんので。

２．会場からのコメント

１）慈善事業よりスポーツの方がやりやすい

小栗:今日のテーマはスポーツクラブの法人化ということなのですが、私はスポーツクラブの場合は、慈善事業に比べれば有利、やりやすいのではないかと思います。というのも、新聞やテレビなどのマスコミは、黙っていてもスポーツは報道してくれるわけです。ところが慈善事業の場合はそうではありません。日本ではキリスト教というものをほとんど考えていないので分からないだろうけれど、ヨーロッパにおいては慈善事業というのは大抵キリスト教の教会であったり、そのような類いのものが絡んでいます。日本のお寺は葬式で稼いでいるわけで、その点にものすごく差があります。そういうところから考えてみると、この慈善事業の法人化に比べれば、スポーツクラブの法人化のほうがやりやすいのではないかと思います。

私は立川市の有料老人ホームに平成 15 年からいて、毎月立川市の広報誌のようなものが来るのですが、例えばそのようなものをうまく利用してクラブを PR するだとか、他にも東京都でも毎月広報誌を出していますよね。要するに、マスコミをもっとうまく使ってスポーツクラブを宣伝するという事を、努力のうちの 1 つにすればいいかと思います。以上です。

中塚：ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

２）みなとラグビースクールの活動と医療機関との連携

田中（三日市整形外科）：メディカルのことで少しお聞きしたいのですが、みなとラグビースクールというのは、小学校の施設で芝生だけを使っているのですか？　それとも教室を使ってそこが更衣室になったり、シャワー室であったり、保健室が使えたりなど、そのようなものをひっくるめて借りているのでしょうか？

黒崎：基本的に日曜日の午前中は、校庭です。

田中：つまりそれはどこかでみんなで着替えて参加する形ですね？

黒崎：そうです。雨天の場合には、体育館もしくは集会室を貸していただいています。

田中：教室は借りていないのですか？

黒崎：基本的に教室には入れないのですが、会議室がありまして、他のラグビースクールにはないことかと思うのですが、そこで練習前に毎回コーチ同士でミーティングをしています。

田中：そこで着替えたりというのは？

黒崎：コーチ陣はそこで着替えます。

田中：子どもたちは？

黒崎：子どもたちは練習着を練習に着てくる、もしくは軒下で着替える形です。

田中：終わった後はどうなされるのですか？

黒崎：終わった後ですが、人工芝の校庭なのでほぼ汚れません。汗をかく場合は、着替えを持ってきて着替えます。女子の子もいるのですが、女子の子はトイレで着替えます。

田中：ぜひ教室を使えるといいですよね。

黒崎：そうですね。構造上小学校の 1 階に集会室と会議室があり、そこの使用が多くなっています。教室は 2、3 階にあるのですが、校舎内で何かあったら困るということで、基本的には 2、3 階には立ち入らないということにしています。ただ、使わせてほしいと言えばたぶん使わせてくれるとは思いますが、我々にそういう発想がなかったです。

田中：ぜひロッカーとして使ってほしいですね。
　あと、トレーナーは有給でいらっしゃるとおっしゃっていましたよね。

黒崎：スクールの方はボランティアで来てもらっています。アカデミーの方は、アジリティーといった形でお金を払っています。

田中：提携している病院だとか、もしくはチームドクターがいましたら教えてください。

黒崎：地域の新赤坂クリニックの先生に顧問をお願いしております。また、提携医療機関としては、私が明治大学のコーチ時代からお世話になっている順天堂大学病院にお世話になっています。

田中：活動は主に日曜日ということですが、そこで発生した外傷はどうなされるのですか？

黒崎：基本的にこの 4 年間、大きい外傷は今のところはありません。一人だけ手をついたときに手の

甲にひびが入ってしまったことはありましたが。

田中：高校ラグビーをやっていてうちの患者さんに来るのも、鎖骨が折れただとかがいっぱいあるので、かなり激しいコンタクトが現場ではあると推察したのですが。

黒崎：小学生などの小さい子どもであればスペースが限られているので、スピードに乗ったコンタクトというものはありません。なので、上に乗った、乗られたであったり、足を踏んだなどといったものはありますが、基本的には小学生レベルでは、しっかりと基本を学ばせれば大きいけがというものは起こらないと考えています。

田中：できれば提携医療機関に、担架でもロゴ入りで入れてもらって、スポンサードしていただくのはどうでしょうか。

黒崎：今日実はお腹が痛くて救急車を呼んだのですが、便秘でした。小学校 4 年生の子なのですが。実際に救急車も来ました。100 メートル先に消防署がありまして、毎年度ご挨拶に伺い、何かあれば優先的に対応していただけるような形にはしてもらっております。

田中：わかりました。NPO 法人の日本整形外科学会では、知られていないと思いますが「ロコトレ」というものがあり、10 月の第一週には骨と関節の日というのもあるんです。全然知られていないと思いますが、よく市民フォーラムもやっています。そこで、幼少期から運動習慣を身につけましょうと私たちはよく言うのですが、運動をする環境がありません。なので、港区のラグビースクールは非常にありがたいと思うので、できればそのようなところと連動して、一度ロコトレをラグビースクールでやっていただけるとありがたいです。

黒崎：そのロコトレとは体を動かせばいいというような話ですか？

田中：ロコトレというのはもっと簡単で、むしろ保護者を相手にするようなトレーニングです。啓蒙活動と並行し、実際に被災地でもやっています。質問としては、実際に実践する場所が現在なく、どこでやればいいのかといったものがとても多くなっています。なので、このようなスクールがありますよということであったり、市でも講習会をやっているのですが、そのようなことをできるだけ皆さんに告知しなくてはならないということを私たちも常々思っています。引き続き頑張ってください。

中塚：ありがとうございます。もう御一方くらいいかがでしょうか。よろしいですか。

３．サロン 2002 の法人化をめぐって

１）理事長より－NPO 法人サロン 2002 のすがた

中塚：では、残り時間を使い、これは完全に私自身の問題意識というか、サロン 2002 の会員の問題意識ということになるのですが、われわれサロン 2002 そのものが、いままさに NPO 法人化に向けて“驀進中”と言いたいところですが、ところどころ迷走しつつ、その中でさまざまなこと

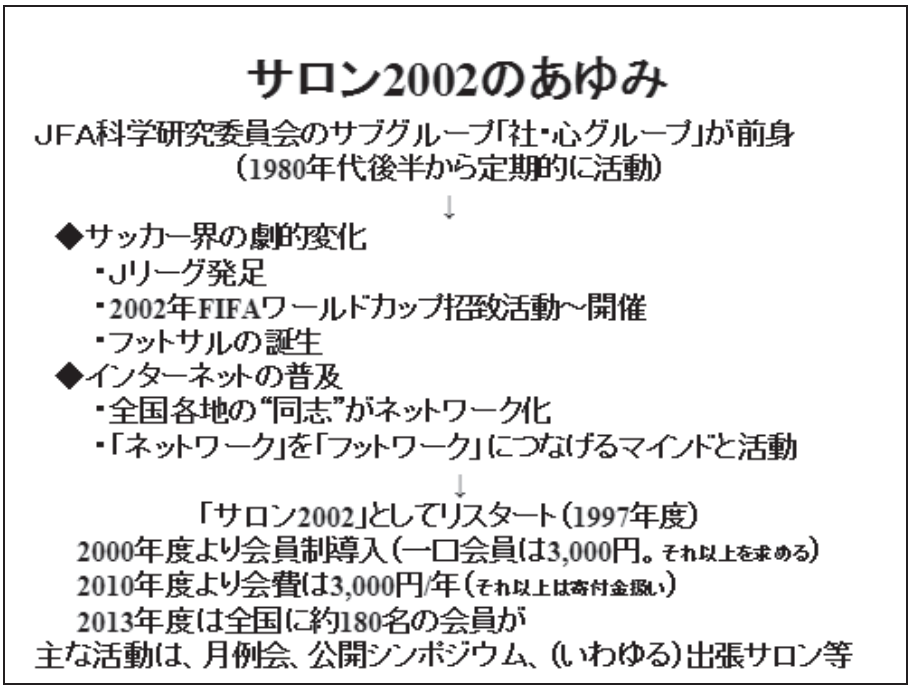
を感じながら進んでいるところです。

会場にいる方のうち半分くらいが会員なので改めて言うまでもないかもしれませんが、主催者であるサロン 2002 とは何かということから、あるスポーツに関わる組織がどのように育ち、どのような動機で法人格を目指そうとし、そのプロセスでどんなことが起きているのかということを 1 つの事例として紹介したいと思います。そして、賀川さんは会員でもあるのですが、演者の方々にアドバイスなり感想なりをいただければと思います。

◆サロン 2002 のあゆみと活動

サッカー協会のある委員会の研究グループで定期的に文献を読んだりしていた人たちの集まりがありました。「社・心グループ」です。それが、80 年代の終わりから 90 年代にかけてのサッカー界の劇的変化の時期です。

私が筑波大学附属高校に赴任したのが 87 年です。修士論文のテーマは「日本サッカーのプロ化」でした。86 年の「スペシャルライセンス・プレーヤー制度導入」、つまり奥寺さんと木村和司さんがプロ選手登録されたことを取り上げたものです。そのような時期に教員になって、そして「社・心グループ」のような研究会に顔を出していたわけですが、そのうち J リーグ発足、ワールドカップの招致、フットサルの誕生など、いろんなことが起きて、その研究会にいろんな人が集まってくるようになりました。



ちょうどその時期、インターネットが普及しはじめます。先ほどのクラブネッツのように、それまでは直接会った人としかネットワークが作れなかったし、遠方の人とのやり取りは郵便が中心で煩わしかったのが、E メールのボタン 1 つで全国の人たちと繋がれるようになってきます。そして、そうやって繋がってきた人に会いたいねというマインドを持った人たちですので、先に飲み会があったりするんですけど、とにかくそのネットワークをフットワークに繋げ、そのマインドと活動により、この研究部グループがサロン 2002 として 1997 年にリスタートしたわけです。

その後いろいろありまして、2000 年度からは会員制を導入し、このような額に設定し、いまでは全国各地に約 180 名の会員がおります。主な活動は月例会、公開シンポ、出張サロンです。

いまこの場は公開シンポジウムですが、2002 年 FIFA ワールドカップに向けてはじめて公開シンポジウムを開き、ワールドカップ後はそこに挙げた内容で毎年行っています。

2005 年度には、クラマーさんにお礼をいう会を開きました。昨年度は U-18 フットサルの全国大会の中日に開催し、関係者にもご登壇いただき、2014 年度からの日本サッカー協会（JFA）主催の全日本ユース（U−18）フットサル大会につながっています。それなりの成果は残してきているのだと思います。

それから、われわれサロンの月例会は、適宜外に飛び出すんですね。伊豆今井浜で合宿をしたのが宿泊行事の最初です。本日お越しの内田さんも参加されましたよね。1997 年に J ビレッジができたときにも合宿を行いました。98 年の鹿島から「出張サロン」と言っています。地元の方々との交流も含めた行事です。このときは、本日の演者でいらっしゃる水上さんも会員として参加されております。2006 年にはついに海外で行いました。牛木素吉郎さんたちと、フランクフルト中央駅の「11 番ホームで集合」としていたのですが、私は午前中、ケルン大聖堂を観光していて予定の新幹線に乗り遅れ、1 時間以上も遅刻してしまい、大変ご迷惑をおかけしました。

「出張サロン」での地元の方々との交流は互いにメリットがあって非常によいのですが、2008 年度はやり過ぎてしまってお金が足りなくなったこともあり、少しばかり停滞しています。今年は「サロン 2002 in リオデジャネイロ」をやりたいなと考えております。

毎月月例会をやっています。今年度の初回が月例会 200 回ということで、それなりの蓄積があるわけです。

サロン2002　公開シンポジウム

- 2001年度 … FIFAｺﾝﾌｪﾃﾞﾚｰｼｮﾝｽﾞｶｯﾌﾟ総括シンポジウム「2002年とその先へのメッセージ」
- 2002年度 … FIFAワールドカップ総括シンポジウム「ささえる物語」「観戦と交流の物語」
- 2003年度 … 2002年を越えて「地域で育てるこれからのスポーツ環境」
- 2004年度 … totoを活かそう！
- 2005年度 … クラマーさん、ありがとう！
- 2006年度 … 2006年 ドイツで感じたこと
- 2007年度 … サッカー観戦を楽しもう！－スタジアム編
- 2008年度 … 地域からみたJリーグ百年構想
- 2009年度 … 2019年ﾗｸﾞﾋﾞｰﾜｰﾙﾄﾞｶｯﾌﾟ日本大会を語ろう！
- 2010年度 … 育成期のサッカーを語ろう！
- 2011年度 … 『高校サッカー90年史』を語ろう！
- 2012年度 … U-18フットサルを語ろう！

いわゆる「出張サロン」－サロンin●●

（1996年度の伊豆今井浜、1997年度のJヴィレッジは「合宿」）

- 1998年度 … 鹿島
- 1999年度 … 新潟、掛川
- 2000年度 … 新潟
- 2001年度 … 清水、神戸
- 2002年度 … 刈谷、（神戸＝シンポジウム）
- 2003年度 … 大分、（両国＝お出かけ）
- 2004年度 … 伊香保、成岩
- 2005年度 … 名古屋
- 2006年度 … フランクフルト
- 2007年度 … 高知
- 2008年度 … 岡山、金沢、那智勝浦 › 行き過ぎ！
  （2009年度の川崎は「お出かけ」、2010年度の堺はシンポジウム、2011年度はなし）
- 2012年度 … 大分臼杵、（名古屋＝シンポジウム）
  （2014年度にサロンinリオデジャネイロ？）

サロン2002　月例会（2013年度）

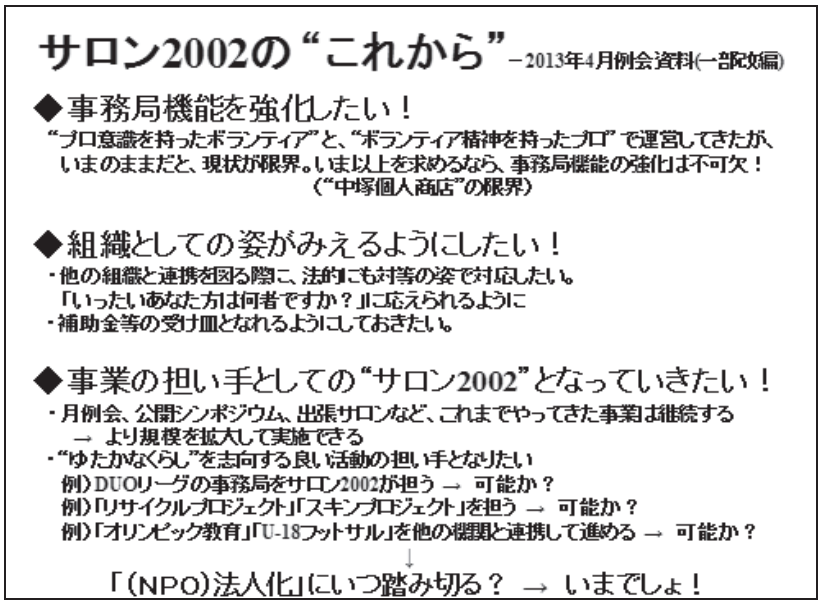
- 4月20日(土) … 月例会200回記念：サロン2002のこれまでとこれからを語ろう！
  サロンin臼杵 & 公開シンポin名古屋「U-18フットサルを語ろう！」報告
- 5月6日(月祝) … 総会
- 6月15日(土) … ﾗｸﾞﾋﾞｰの歴史と文化／7人制と15人制ﾗｸﾞﾋﾞｰの現状
- 7月18日(木) … コンフェデレーションズカップ2013を振り返って
- 8月24日(土) … サロン2002の法人化を考える（第1弾）
- 9月24日(火) … オリンピック教育の行方
  －第9回国際ﾋﾟｴｰﾙ･ﾄﾞ･ｸｰﾍﾞﾙﾀﾝ･ﾕｰｽﾌｫｰﾗﾑで感じたこと
- 10月27日(日) … サロン2002の法人化を考える（第2弾）
- 11月22日(金) … ケニアから見た「スポーツを通したゆたかなくらし」
- 12月28日(土) … お宝映像上映会兼忘年会
  －ペレ特集／1982ブラジルvsアルゼンチンほか
- 1月26日(日) … FCバルセロナ憲章に見るバルサの本当のすごさ
- 2月23日(日) … 総会＆法人化へ向けての意見交換会
- 3月30日(日) … 公開シンポジウム「スポーツクラブの法人化を語ろう！」
- 4月24日(木) … タッグパートナーとしてのスポーツとアート（第3弾）
- 5月31日(土) … 総会

◆サロン 2002 の法人化

こういった活動しながらも、これからのことを考えていかなければなりません。今年度 4 月の月例会で用いたスライドをもう一回手直ししてご紹介します。

先ほどから賀川さんの話にもありましたが、要は 1 人が頑張るだけは組織とは言えない。「中塚個人商店」では限界があります。そこで事務局機能を何とか強化したい。

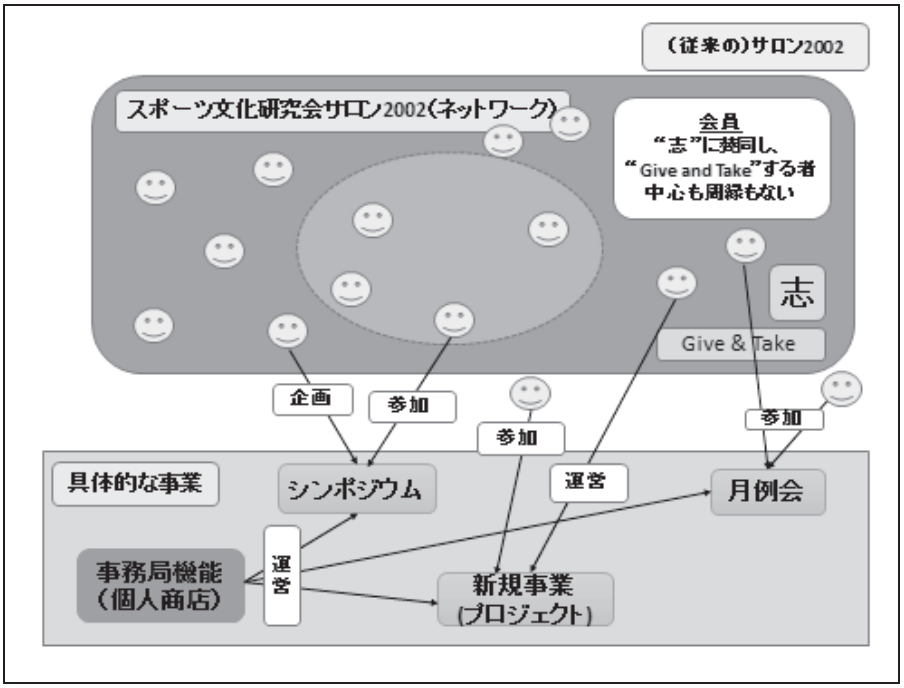
それから、これもいろんなところと連携するたびに「サロンって何なの？」という説明が必要なってきます。組織としての姿が見えるようにしたい、その話の先には補助金の受け皿となって何らかの事業主体となりたいとうこともあります。



我々の志はクラブネッツよりももっと曖昧で、“ゆたかなくらし”と表現しています。それをどうやって実現するのかということですが、“ゆたかなくらし”につながることは多々あるだろうと考えます。ユース年代のリーグ戦だとか、リサイクルプロジェクト、今日もアーティストの佐藤いちろうさんが来られていますが、そういうことも取り組んでいきたいことの一つです。あるいはオリンピック教育や U-18 フットサル…。このような様々な事業の種がわれわれの前に転がっているのですが、それは中塚個人商店だけで行うは難しいなということです。

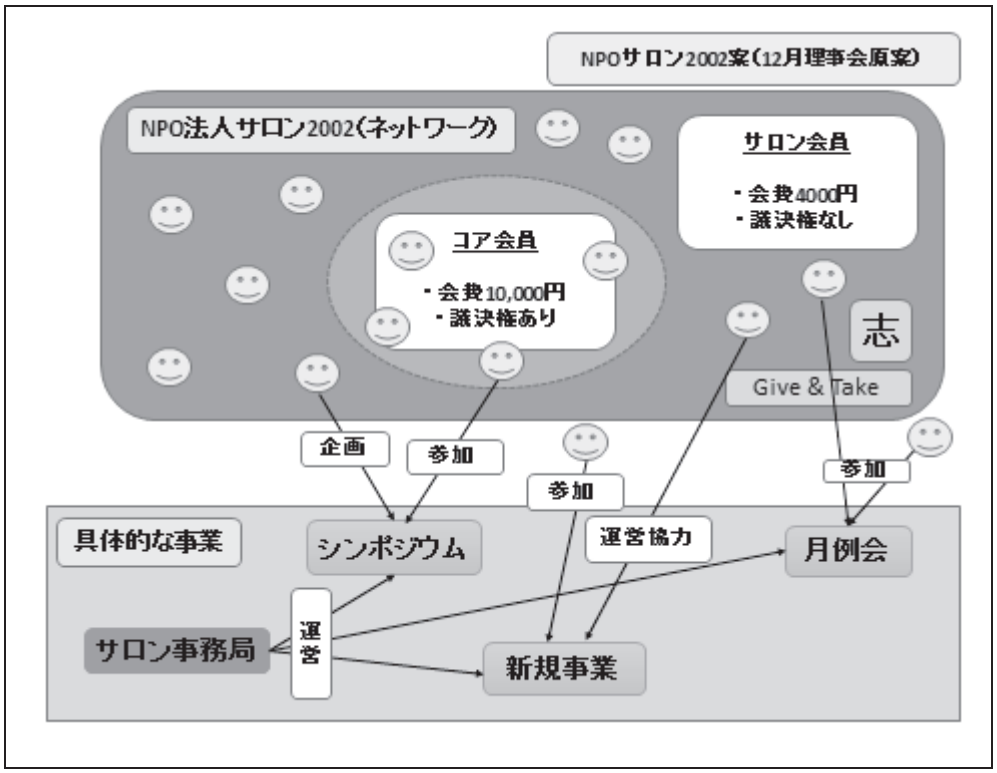
最初はただ単に「法人化」と考えていましたが、いまでは「NPO 法人化」だなと考えています。このことを 1 年かけて議論してきました。

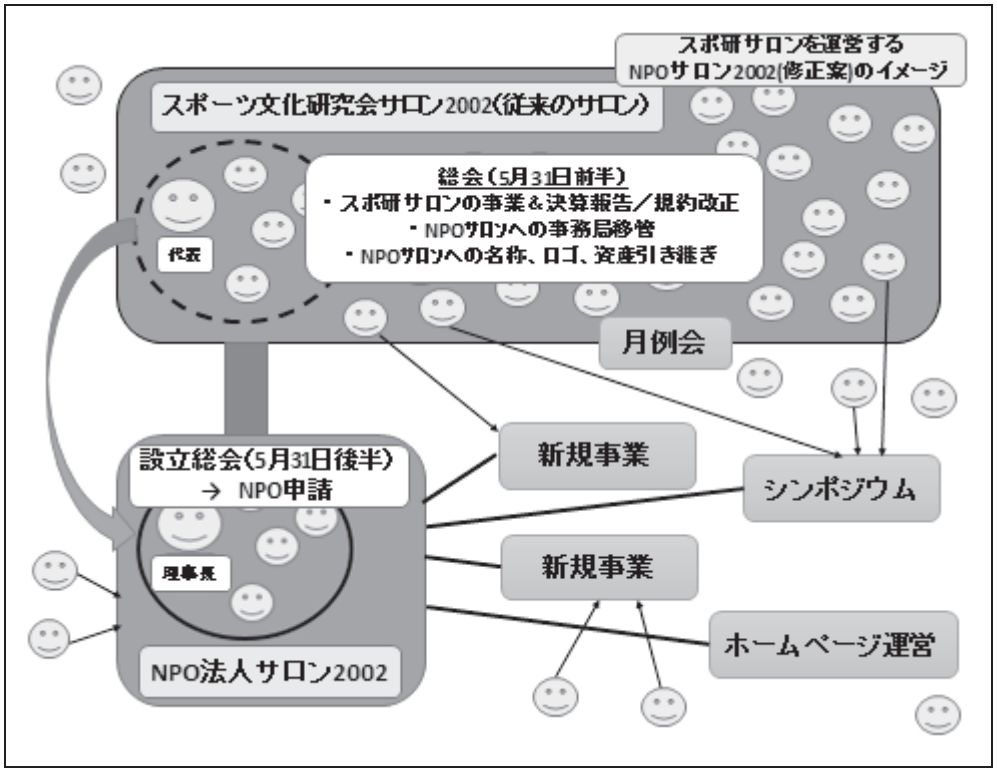
絵で描くとこのようになります。サロン 2002 は、いまはまだ右図のようなかたちです。上に描いたネットワークそのものがサロン 2002 の本体で、要はネットワークなんです。“志”に賛同し、自分には何ができるか、会費を払うとかそういうことだけもいいんですけど、ギブ&テイクという言い方をしますが、そういう人がメンバーなのだから、中心も周辺もないんだと。ほんの少しだけ色を変えて表現してみましたが、本当は、ネッ



トワークの中にいる人の色はみんな一緒なんです。全てが平等。けど 20 年もやっていると、中心的に関わる人とそうでない人の間に、知らず知らずのうちに意識の差が生じてきたのは事実です。

具体的な事業は下にあるようなことで、会員だけでなく、非会員の方々も、これらの事業に参加してもらう。そういう意味ではオープンな組織でした。





これをどういう形で法人化をするか。まずわれわれは、従来のネットワークそのものに、知らず知らずのうちに中心と周辺が生まれていたので、中心の人たちには議決権を持って、自分たちのネットワークに主体的に関わってもらおうと考えました。「コア会員」です。

一方、議決権は持たなくてもいい、ネットワークの一員であればいいよっていう人たちを「サロン会員」と呼び、ややこしい総会の出欠を取らなくていいからネットワークの一員でいたいという方を「サロン会員」として残ってもらおうと考えたのです。従来の事業はそのまま展開します。

しかしこれに関して、一部の会員から、「せっかくこれまで平等だったのになんで会員の種類が変わるのか？」「平等で緩やかだった良さがこれから失われてしまうじゃないか」というような意見が出てきます。

そこで、さまざまなスポーツ NPO の事例、

例えば、先程言ったかながわサッカークラブの法人化の事例などを参考に、いまでは次のような形で進めようと考えているんです。

つまり、従来のサロン 2002 は、そのまま残ります。けど、それをしっかり運営する組織を、サロンのネットワークの外に置き、従来のネットワークを責任を持って運営してくれる NPO 法人サロン 2002 をイメージして準備を進めているところです。さまざまな事業はこの NPO が取り組みます。

ゆるやかなネットワークにつながっていたいが、ややこしいからいろんな事業には関わらないという人たちも、ネットワークにとどまることができるわけです。

もっとやってみたい人たちには、NPO 法人サロン 2002 の社員になっていただく。そういうイメージです。

5 月 31 日に総会を開くところまで決まっています。あと 1～2 ヶ月なので、今日は貴重な機会です。

２）各演者からのコメントーNPO 法人サロン 2002 のすがた

中塚：サロン 2002 に対して演者の皆様からアドバイスを頂きたいということが本日の締めとなります。
どういう順番にしましょうか？
では会員でもある賀川さんからいかがでしょうか？

賀川：先ほどおっしゃった事務局を作るということですが、その事務局の人が専従になるかどうかは別として、ある程度保証をして働いてもらうために、やはり何らかの形で組織を作らないといけないということは確かでしょうね。それ以外には僕はあまり良い考えはありませんけどね。

中塚：ありがとうございます。では黒崎さんお願いします。

黒崎：私たちみなとラグビースクールは、一緒じゃないけど似たような形をしております。左下の部分がいわゆる法人の運営です。あと各部門というのが、その上に入ってくるような形です。そしてコーチだとかアシスタントコーチ、つまり現場を回してくれる方々には、部門登録用紙というものを毎年作っております。そこに名前に 2,000 円を添えて出していただくという形で、上だけで完結しております。下はいってみれば、理事以上の方々と社員の方々が集まって、年会費 1 万円、理事の方にはそれ以上にお役に立っていただいているので、本人が社員になる意思を示さなければ取らずにご協力をいただくような形になっております。

先ほど中塚さんが仰られた通りに、NPO の申請ってすごく大変なんですよ。その事務手続きをいかに完璧なものというか、上手にやっていこうというのであれば、そういうことが好きな方がいらっしゃいますので、例えば、うちの会社にも法務部にいる若手社員にお願いして手伝ってもらいました。

あと社員を何人かにするのかということも結構大きな問題があって、どこまで広げるかということ。当然、今の組織があるならその方々に募らないといけないです。理事を誰にやっていただく、どういう意義でどのポストを用意するか。理事がたくさんいてもあまり意味がないのですが、少な過ぎると意見が反映されやすく、独裁みたいな形になりますので、そういう意味では私たちも半年前から始めて、時間を割いた状況なのです。最終的にわれわれは司法書士に頼みました。そこは役割分担を明確に進めていただくことで見えてくると思います。

一方で、設立して事務局とか作られると思うんですけど、会計的な要素も設立後に入ってきます。そこで税理士さん、公認会計士さんとかが参画する。そこは最初は紹介ベースで広がっていくんですけど、そこら辺をしっかりコントロールしながら進めていけば、いまやっている活動であれば、何ら問題ないと思います。

法人化と今まで何が違うのかというところ、そこはやはりビジョンを明確にした上でご賛同を得なければいけないのかなと思います。

中塚：ありがとうございます。では水上さんお願いします。

水上：お二方のスタンスと僕は全然違うので参考にないかもしれませんが、組織を作っていく間に、例えば、事業年度を 3 月締めにするか年末にするか。理事がどれくらいの人数がいいか。そういったアドバイスももちろんあるんですけど、やはり今日のプレゼンの中で伝えたかったことは、何を成果とするのか、受益者は誰なのか。シンポジウムをする、本を出版する、報告書を出す。これは他の団体でもできます。私は「サロンド東海」という、同じような勉強会に所属したことがありますが、そこでもできるんです。クラブユース連盟でも、塩釜の小幡さんでもできます。ではサロン 2002 にしかできないことは何か。例えばサッカーの人工芝で発電しますとか、サッカーの監督と子どもたちが地域の買い物弱者の手伝いをしますとか、そこにどういう受益者がいてどういう成果を出すのかというのを、ガラパゴス化しないで、社会の問題との接点を考えることもものすごく大事と思います。そうでなければ、いまサッカー界にとって本当に救わなきゃいけない問題は何なのかということを。ここを解決するために私たちはミッションを掲げて、前例、慣習、ルールを打ち破り、必要な人材を集めて、ミッションを達成します。受益者は一人か二人かもしません。サッカーを愛する子どもの心臓手術を北米で実現するために 2000 万円集める場合、受益者は 1 人だけです。けど、サロンにとっては社会的便宜性というのは僕はものすごく高いと思います。スポーツ界にとっても。

クラブネッツが今度出す「1 クラブ 1 ソーシャルグッド」というのは、3,500 の総合型地域スポーツが、クラブとして必ず 1 つの社会問題に取り組むというミッションなんです。そのなかで、けっこう震災支援とか介護問題とか高齢者の移動の問題とかを支援しているとか。他の NPO からすると社会的負担物だよねと、こっそり言われるかもしれない。

サロン 2002 が法人するのは、何を成果にするのかということに尽きると思います。その成果が何かによって組織の中身も変わってきますし、関係性も変わってきますし、事業の内容も変わってきます。

今日は広瀬一郎さんのビラを入れさせていただいているんですけど、広瀬一郎さんをなぜ入れているのかというと、スポーツマンシップ指導者育成会というのを NPO 法人でたてられて、スポーツマンシップという信念を持った制度を資格制度として出すという。これはこの法人のオリジナルだと思います。そこじゃないかと思います。そこがはっきりすれば組織も会員の関係性も事業の内容も月例会もなんかも変わってくるかと思います。

中塚：今後サロンとしても検討をしながら、どのような方向性がいいのか、あと 2 ヶ月でしっかりと結論を出して、良い方向へ向かっていきたいと思います。

5．おわりに

中塚：最後にお三方から今日のシンポジウム全体を通してのご感想を。ここは順序を入れ替えて水上さんから順番にお聞きしてこのシンポジウムを閉めたいと思います。水上さんお願いします。

水上：今日のプレゼンで一番伝えたいことは、NPO は「ミッションは何か、何を成果とするのか、

受益者は誰なのか」ということです。しかもそれがその NPO にとってオリジナルなことであるか、ということを見定めるということに尽きます。
クラブネッツは、全国の各スポーツクラブが世の中のソーシャルグッドに取り組む、その成果を確実に社会に還元するという使命を掲げています。ありがとうございました。

黒崎：今日は長時間お付き合いしていただきありがとうございました。私自身もいまやっていることを、皆さんに聞いていただく良い機会になったと思います。これからは絵を描くだけじゃなくて繋いでいきたいと思っております。違うスポーツであろうが、次の世代を育てることは共通の認識だと思うので、これからオリンピックやワールドカップに向けて、私は港区で一所懸命やっていきたいと思います。もしこれを機に、なにかお力添えいただけること、得意なこと、こういう話があるよってことがあれば、私が広げて現場に落とすことが仕事と思っていますので、ぜひお力添えをいただければと思います。本日はどうもありがとうございました。

賀川：古い話を聞いていただいて、参考になったかどうかはわかりませんが。我々が始めたとき、神戸 FC は、途中でプロの問題もありましたけど、そこに埋没しないように、アグリーメントで下部組織だけを入れるということにしました。それは、このクラブは 100 年たったらどんなことになるのか、どんなことがあったのかがわかるだろうと。イングランドを見れば 100 年くらいのクラブはいっぱいあります。イングランドとは形態は違うけども、ヨーロッパの会員型のクラブもほとんど 100 年の歴史があるわけです。スポーツというのは保守的な部分もあるわけですけど、要するに齢を重ねていくことを我々はやってきたわけです。もうしばらくしたら神戸 FC は 50 年になりますが、70 年、100 年たってどういうふうになっていくのか。私は見届けることはできませんが、長生きしてみていきたいと思っております。ありがとうございました。

中塚：どうもありがとうございました。一般論として、スポーツの担い手となるクラブをどのように永続的なものにしていくかということに関して参考になる内容がいっぱいあったと思います。
　個人的には、我々の組織であるサロン 2002 にとってすごくためになる中身がいっぱいありました。これからも続けて参りますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。
　3 人の演者の方にもう一度大きな拍手お願いします。では、シンポジウムを終わりにします。

＜参加者アンケート＞

※アンケートにご回答くださった方の中で、「報告書に掲載してもよい」とされた方について、順不同で掲載します（敬称略）。

■牛木 素吉郎

Ａ．パネリストのお話

１．黒崎さんの青山ラグビークラブのお話が興味深かった

①小・中学校の校庭に人工芝を敷き、フットボール・スクールなどに利用する運動を全国で展開したい。普及のためには天然芝よりいいように思う。

②スクール→NPO 法人→クラブの道筋も興味深い。市区町村の協会を一般社団法人にして表に立てるのは賢明だと思った。

③神戸フットボール・クラブが 40 年以上前に行っていたことを、ラグビーが始めている。神戸ＦＣは反中央（反協会）のニュアンスがある動きだったと考えているが、黒崎さんの場合は、日本ラグビー協会との関係はどうなのだろうか？

④黒崎さんたちの企画力、実行力には感服のほかはないが、中学校と企業に頼ろうとしているお話には疑問を感じた。神戸 FC は「年齢別登録」を推進して学校離れを目指し、企業を離れた「クラブ」としてスタートしたのと対照的である。

Ｂ．サロン 2002 の法人化

①パネリスト３氏のお話を聞いて「サロン 2002」でのこれまでの議論では「ＮＰＯ」と「クラブ」との区別が明確に認識されていなかったのではないかと思った。
NPO は公共のための事業目的（ミッション）を持つ民間の非営利事業団体で、「クラブ」は、もともとは社交目的の仲間の集まりである。クラブとしての活動は任意団体あるいは一般社団法人として行うのが適当だと思った。

②「サロン 2002」の月例会は、「クラブ」としての性格が強く、そこに良さもあったと思う。

③現在提起されている案が、「サロン 2002 月例会」を、そのまま存続させ、別に NPO 法人を設立するという趣旨であれば、適切だと思う。

④新設の NPO 法人は「サロン 2002」の呼称を避け、ミッション（事業目的）が分かるような別の名称しにしてはどうか。「サロン」はクラブ的な名称だから混同を避けたい。

⑤手続き的には、新ＮＰＯ法人設立は従来の「サロン 2002」とは別に行ってよいのではないか。従来の「サロン 2002」には、新ＮＰＯ法人を設立することを報告し、発起人（社員）を求めるにとどめ、応募者により設立すればいいのではないだろうか？

Ｃ．シンポジウムの運営について

①参加者が少なかったのは、テーマとタイトルが、一般向けでなかったので、やむを得なかったと思う。「公開」の場合のテーマとタイトルは、多くの人にとって興味のあるものにして欲しい。

②内容は非常によかった。これまでのシンポジウムのなかでも、もっとも内容の濃いものだったと思う。特に黒崎さんのラグビーの組織作りのお話は示唆に富んでいた。

③いつものことだが、内容を欲張りすぎていたので時間が足りなかった。結果論だが、黒崎さんのお話をメーンテーマにして、十分にお話を聞き、後半に 2 人くらいのパネリストを入れて、質問と討論をすればよかった。

■笹原 勉

各縁者の発表は大変参考になった。箇条書きで挙げると

- 個人の超人的活躍に頼らない組織運営が法人化で可能となった
- 設立時のメンバー以外と理念と方針を理解させることが法人化の目的の１つ
- NPO 法人と行政の連携
- ミッションの再構築
- 寄付金によるファンドレイジング
- 人を育成し、活用し、配置する
- サロン 2002 の独自性・・・受益者と成果、社会の抱える問題の解決
- Rule Oriented vs Mission Oriented

■室田 真人

本日はありがとうございました。

■田中 俊也

NPO　法人化　スポーツ

なかなか一元化できない問題ですが、理解の一助となりました。

■岸 卓巨

スポーツは社会の課題を解決する１つのツールとして、さまざまな社会問題にアプローチしていけることが１つの利点だと思います。水上氏の１つのクラブが１つのソーシャルグッドに取り組む考え方は示唆に富んでいますが、サロンに置き換えて考えた時に、サロンとしてたくさんある社会問題の１つを解決するために法人化するのではもったいない気がします。NPO 法人サロン 2002 として、スポーツは社会問題を解決するツールになるということを念頭に置き、社会問題の解決に取り組んでいるさまざまな NPO と連携して事業を行っていければと思います。例えば、過疎化問題に取り組む NPO と連携してスポーツをツールとした地域活性化策を考える。投票率低下問題に取り組む NPO や自治体と連携して、投票場でサッカー大会を開催するなど。さまざまな自治体や NPO と連携を図りやすくするための法人化を望みます。

■佐藤 一郎

大変貴重な話でした。

「どう社会に残すのか？」この問題が法人化が担う役割なんだと思います。

サロン 2002 の役割は「豊かなスポーツライフ」を他の NPO にない形をみせる事が重要だと思いました。（新しいスポーツの取り組み）

■徳田 仁

水上氏の発表の中に、何を成果とするか、受益者は誰かということをはっきりさせるべきとありましたが、その通りだと思います。サロンの法人化にあたり明確な課題が提示された気がします。

■白髭 隆幸

バックボーンや年代的に異なるお三方から「スポーツの法人化」のお話が聞けて、たいへん有意義でした。サロン 2002 の法人化に向けても示唆に富むお話であったと思います。サロン 2002 in ブラジルも楽しみにしています。

■小栗 純二
今日は初参加でしたが、非常に有意義でした。中塚先生頑張ってください。

■河原 工
とても有意義でした。今回の様にサッカー以外の関係者からも話を伺うのはとても良いことと思います。ご準備方ありがとうございました。

■安藤 裕一
体調不良で水上さんの話しか聞けなくて残念でした。水上さんの「本当に役に立っているのか」と自問しながらの活動は立派だと思います。その精神がある限りは、道は譲らないでしょう。成果の「みえる化」も NPO として大切であることがわかりました。

■熊谷 建志
会社で新しい事業立ち上げに関わっている関係で「それが何の役に立つのか」「それがどのような効果を生むのか」という課題と成果の関係について日々考えています。地域のニーズに応えて地域の人々のネットワークとともに育つクラブは、比較的目的・目標を作りやすく見えましたが、クラブネッツやサロン 2002 はこれまで見えづらかった課題を解決することが可能が故に、立ち上げが難しいところにあることを実感しました。一言で、多様で幅広い人材を生かす組織は何だろうというのがシンポジウム後の自分への疑問です。

■小池 靖
50 年の実績を重ねられた賀川様のお話、ラグビーの定着を目指されて活動を始められた黒崎様のお話、様々な NPO とのおつきあいの中から NPO 法人が抱える今日的な問題についてご説明頂いた水上様のお話、いずれもスポーツが持つ社会的な意義と法人化を考えてゆく上でとても有益な内容ばかりで、新鮮な刺激を戴きました。是非、何らかの形でアウトプットしてゆく、原動力としてゆきたいと思います。

■千葉 洋平
いつもは学会や学会主催のシンポジウムなどの会には参加しているものの、このような現場の方たちが主催しているシンポジウムに参加するのは初めてでした。現場の方たちの先進的な考え方や活動に触れることができ、大変新鮮で勉強になりました。また現場にある課題をリアルに感じることができ、何を研究すべきなのかを改めて考えさせて頂ける機会にもなりました。

■無記名（シンポジウム報告書への記載可）
それぞれの話、興味深かったです。
神戸 FC～INAC 神戸のつながりも初めて知りました。
ラグビーはやはり大企業とのつながりからかな。
クラブネッツという NPO もあるんだ。もう少し詳しく知りたくなりました。

サロン2002公開シンポジウム一覧（2001～2013）

2014.5.31.

年度	期日	会場	テ ー マ （演者）
2001	2001.7.22.	横浜国際総合競技場	コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム 長岡茂、竹原典子、小島裕範
2002	2002.8.3.	東京体育館	ワールドカップ総括シンポジウムⅠ ー「ささえる物語」を中心に 長岡茂、村林裕、宮城島清也
	2002.8.10.	神戸ﾌｧｯｼｮﾝ美術館	ワールドカップ総括シンポジウムⅡ ー「観戦と交流の物語」を中心に 賀川浩、スー木下、橋本潤子、宇都宮徹壱
2003	2003.8.2.	東京体育館	2003公開シンポジウム 「地域で育てるこれからのスポーツ環境」 中塚義実、宇都宮徹壱、山下則之
2004	2004.11.27.	立教大学	2004公開シンポジウム 「totoを活かそう！ ー地域スポーツ振興のために」 福西達男、高橋正紀、徳田仁、両角晶仁
2005	2005.11.12.	味の素スタジアム	2005公開シンポジウム 「クラマーさんありがとう！」 D.ｸﾗﾏｰ、賀川浩、両角晶仁、大橋二郎、中塚義実
2006	2007.3.24.	日産ｽﾀｼﾞｱﾑ内	2006公開シンポジウム 「2006年 ドイツで感じたこと」 池田誠剛、庄司悟、徳田仁
2007	2007.12.15.	青学会館ｱｲﾋﾞｰﾎｰﾙ	2007公開シンポジウム 「サッカー観戦を楽しもう！-スタジアム編」 仲澤眞、徳田仁、宮明透
2008	2009.1.31.	日本青年館・会議室	2008公開シンポジウム 「地域からみたJリーグ百年構想」 宇都宮徹壱、宮明透、守屋実
	2009.3.21.	那智勝浦町体育文化会館	日本サッカー史シンポジウム 「中村覚之助と日本サッカーの夜明け」 牛木素吉郎、森岡理右、山本殖生、中塚義実
2009	2010.2.6.	ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ記念青少年総合ｾﾝﾀｰ	東京シンポジウム 「日本サッカーの始祖 熊野の中村覚之助」 中村統太郎、真田久、加藤弘、中塚義実
	2010.3.6.	青学会館ｱｲﾋﾞｰﾎｰﾙ	2009公開シンポジウム 「2019ラグビー・ワールドカップ日本大会を語ろう！」 岩渕健輔、直江光信、島田佳代子
2010	2011.3.5.	堺市立ﾅｼｮﾅﾙﾄﾚｾﾝ	2010公開シンポジウム＝デンソーシンポジウム 「育成期のサッカーを語ろう！」 上田亮三郎、松田保、黒田和生、関塚隆
2011	2012.3.4.	味の素スタジアム	2011公開シンポジウム 「『高校サッカー90年史』を語ろう！」 北原由、牛木素吉郎、賀川浩、中塚義実
2012	2013.3.23.	臼杵市民会館小ホール	サロンin臼杵「竹腰重丸を語る」 浅見俊雄、牛木素吉郎、吉田稔、中塚義実
	2013.3.30.	テバ・オーシャンアリーナ	2012公開シンポジウム 「U-18フットサル」を語ろう！ 松崎康弘、大立目佳久、岩本芳久、中塚義実
2013	2014.3.30.	筑波大学東京キャンパス	2013公開シンポジウム 「スポーツクラブの法人化を語ろう！」 賀川浩、黒崎祐一、水上博司、中塚義実

注1）「日本サッカー史シンポジウム」は、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブと日本サッカー史研究会が主催し、サロン2002が協力。「東京シンポジウム」は、熊野三山協議会主催、サロン2002は共催した。

注2）「デンソーシンポジウム（2010公開シンポジウム）」は、株式会社デンソーの特別協賛のもと、（財）日本サッカー協会、全日本大学サッカー連盟、デンソーカップ実行委員会とサロン2002が主催した。

注3）「竹腰重丸を語る」は、サロン2002が主催する「サロンin臼杵」として開催。臼杵市、臼杵市体育協会、臼杵市教育委員会、日本サッカー史研究会、一般社団法人東大LB会、ビバサッカー研究会、臼杵市サッカー協会、社団法人大分県サッカー協会の後援、また地元の多くの企業の協賛を得て開催した。